私は愛どる！春香&千早過去編

ダディP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私は愛どる！春香＆千早過去編

【Ｎコード】
Ｎ１１２３Ｖ

【作者名】
ダディＰ

【あらすじ】
８７６・７６５合同ライブから帰ってきた千早は、絵理を迎えに行くからと預けられた愛・涼とともに７６５プロ事務所へ。
そこで四年前の話を愛に尋ねられ、千早は過去へと思いを馳せる。

その１『繋がった正反対』（前書き）

私が某動画サイトで書かせてもらっているｎｏｖｅｌｓｍ@ｓｔｅｒの過去話みたいなものです。
最近作りかけの動画が吹っ飛んでしまい、仕方ないから過去編を文章化でもしてストレスを解消しよう！とカッとなって作ったものですが、もちろん今後動画にも上げることになるので、ネタばれしてほしくないという方は閲覧を中止することをお勧めします。

ここでは四年前のフリープロデューサー日高と、春香千早、７６５プロとの出会いから始まる物語を描いていくつもりです。

その1『繋がった正反対』

「ねえ、私の歌ばっかり聴いてて、そんなに楽しい？」
――――うん、楽しいよ？だってお姉ちゃん歌上手だし、
それに――――歌うから・・・。

「・・・ん？」
一瞬声が聞こえたような気がして、日高は公園の広場のほうに振り向いた。

公園に時計はいらない。その時その時の人の出入りで、大体の時間がわかる。
そこで遊んでいた子供らがぞろぞろと帰っていくいわば人時計に逆らって、うまい具合に夕日の差し込む位置を避けたベンチに、彼は腰かけていた。
勿論遊んでいたいからではない。日高はマイナーなところだがアイドルのフリープロデューサーだ。
『伝説』とまで言われたアイドル『日高舞』の夫にして元プロデューサー。そんな彼はその時の大成功が原因で起きる、当然とも言える過度の期待に添えないプロデュース生活を送っている。
プロデューサーとして三年前にフリーになってから、少しのブランクを挟んで五年目。業界では彼はまだ若い。元々日高舞の成功だって彼自身の功績ではなく、彼女の素質に頼っていた面が大きい。
彼もそれを自覚しているからこそ、その重圧を受けきれないでいる。
今日はそうして悩みながらここに座っていたのだが・・・。
（今のは歌声・・・だったな）

ふと聞こえたその声は、まるで彼を呼び寄せるためのそれのように、日高を自然とベンチから歩きださせていた。

「〜〜〜♪」

「・・・ここか」

広場に出ると、歌声がはっきりする。姿は小さくてよくわからないが、公園のすみで一人の少女が歌の練習をしているようだ。

綺麗な歌声だ。ずっと日高舞の歌を聴いていた彼にそう思わせるほど、彼女の歌声は対角線上に立つ彼にも透き通って響く。

ただ、上手いといってもプロの歌手に比べればまだまだ程遠い。人の心を掴んで離さないような魅力があるわけでもない。それでも何かがこう、心の中で引っかかるのだ、彼女の歌は。

「・・・・？」

風がひとつ吹き抜ける。群青の髪がさらさらとなびいたその瞬間、歌声が少し途切れたように感じた。

「・・・あの、何かご用でしょうか？」

「・・・・え？」

感じた、ではない。事実彼女は歌を止めて、今まさしく日高の目の前に立っているのだ。

気がつけば彼女に一番近いベンチに座り、じっと見つめてしまっていたらしい。

「あ、ああ悪い。別にそういうわけじゃないんだ。ただ上手いなって思ってさ」

「そう、ですか？ありがとうございます」

取り繕って賛辞を述べたものの、彼女は日高に対する不信感がぬぐえないようだった。

「音楽学校にでも通っているのかい？趣味で片付けるにはもったいない歌声だけど」

「いえ、そんなところには通ってません。全部独学なんです」

かたい表情は崩さずに、彼女は律義に答える。

「私は、歌手になりたいんです」――――そう付け加えて。
心に引っかかるなにか、その正体はまだわからない。彼女の表情からは何も見えなかった。
「キミ、名前は？」
「え？」
「え・・・あ」
引っかかりの解決を求めるがままに、名前を尋ねる。・・・が、これはなんかまずくないか？
初対面の女の子を無言で見つめた上で突然名前を聞くなんて、向こうからしたら不審者みたいじゃないか！？
「あ、いや、すまない忘れてくれ！答えたくなければ答えなくていいから！」
「！？」
心証は最悪だ・・・。これじゃ変な目で見られるのも仕方な・・・。
「・・・如月、千早です」
「・・・え？」
そんな彼を滑稽に思ったからか、初めて彼女は柔らかく表情を崩した。
「聞こえませんでしたか？」
「いや、聞こえたよ。悪い、取り乱したりして」
「いえ、少しびっくりしましたけど」
そうして、少し笑う。
「っと、俺の紹介が遅れたね。俺は日高嶺司、仕事は・・・プロデューサーって言ってもわからないよな。アイドルを育てる仕事をしてるんだ」
「アイドルの、ぷろでゅーさー？」
「・・・ああ、うん。マイナーな職業だからわからなくてもいいよ」
「そう、なんですか？」
いかにも聞き慣れないといった風な面持ちの千早に、日高は軽く

頷いた。
「アイドルというと、あのテレビに出ていたりする子たちのことですか？」
「ああ。とはいっても今はどの事務所にも属してないフリーだし、担当のアイドルもいないけどね」
　気がつけば陽はもうずいぶん隠れてしまっている。公園に見える人影はもうほとんどなかった。
「・・・話し込んで悪かったね、練習の邪魔をしちゃったな」
「いえ、こうして話すことが少ないので、楽しかったですよ？」
「ならいいんだけど・・・。さて、そろそろ帰らないで大丈夫？夜遅くなると危ないし、親も心配するだろ？」
「・・・いえ、もう少し練習していきます。いつも遅い時間までやっているので、母もわかっていると思いますし」
（・・・？）
　一瞬、表情が曇ったような気がした。ただ、気がしただけで実際千早の顔は何も語ってはくれなかった。
「そっか。俺が口出すことじゃないしな、俺は帰るよ。それじゃあ」
「ええ、それでは」

・・・俺は一体何をしているんだろう。
　帰路の途中にあるわけでもないのに、真っ先に足が向いた。
　気になっているのだろう。ただ、そのはっきりした理由がわからないのだ。
　歌が上手い子はたくさん見てきたし、夢のために努力している子なんて例に漏れることなく全員がそれだった。
「・・・こんにちは、日高さん」
「や、連日悪いね」
　何故かこの子だけは妙に気になる。それはきっと初めて彼女に会

ったときから感じている心の引っかかりと、最後に見た暗い表情のせいだろう。・・・やっぱりその引っかかりの理由はわからないままだが。

「わざわざ声をかけてくれなくてもよかったのに」

「まったくの他人というわけではありませんし、挨拶ぐらいは。それに丁度休憩しようと思っていたところです。・・・隣、いいですか？」

「ん、ちょっと待っててくれ」

そう言って日高は腰を浮かし、背後にある自販機に歩いていく。

ガシャン！という音を出して自販機は二本の缶ジュースを吐き出した。

「ほい、どっちがいい？」

「え？いえそんな、悪いです！」

「いいのいいの、もう買っちゃったし」

遠慮するなと千早の目の前に缶を差し出す。しぶしぶと右手に持っていたものに手を伸ばした。

「それにしても、昨日今日と来てくれますけど・・・暇なんですか？」

「ぐっ・・・！来てるのは俺が来たいからだが、暇といわれるのは堪えるな・・・」

「ふふ、冗談です。でも、やっぱりまだ所属する事務所は決まってないんですか？」

「ん～、いや。今日こんなことがあってね」

それは、三時間ほど前に遡る。

街中というのは雑踏というイメージがあり、皆がそれぞれ別の行動をとるための通過点であるため気を留めるようなことはないと思いがちだが、実はそうではない。

横ばかり向いた矢印の中で一本だけ上を向いた矢印を見れば、誰

だって気になる。注目するほどではないまでも、「何だろう、あれ」程度には思うだろう。
・・・それがより長く、より太く、他と色が違えばなおさらである。
（なんだ、あの人・・・？）
夏ではないが、日焼けしている人ならきっとどこにでもにいるだろう。そうではない。
『真っ黒』なのだ。服との継ぎ目がわからないぐらいに。そんな人間の形をした『何か』が道行く人たちを値踏みするように眺めている。
（あまり目を合わせたくはないな・・・）
ああいう手合いは無視するに限る。そう思うと気持ち早足になるが、日高は気づいていなかった。この時皆に合わせて常速にしていたほうが、彼の思惑に合っていたことを。
街中とは『雑踏』という文字通りのイメージがあるが実はそうではない。個々の速度は違うはずなのに、不思議なことに街中での速度というのは対して違わないのだ。そんな中で一人だけ速度を上げれば、今そこにいる黒い彼のように目立つのは自明の理であり。
「おお、そこのキミ！ちょっと待ってくれたまえ」
「・・・」
同じく目立つ上、雑踏を値踏みしていた彼の目に留まるのは当たり前だった。
声をかけられてしまっては、乱暴に無視するわけにもいかない。
「・・・何です？」
「うむ、よく来てくれたね。・・・ほうほう、うーむ・・・なかなか、いい面構えをしているね」
「はぁ・・・あの、あなたは？」
「ああ、すまない、自己紹介が遅れてしまったね。私は高木順一郎といってね、アイドル事務所の社長をしているのだよ」
「アイドルの、ですか？」
「うむ、しかし最近始めたばかりでね、アイドルも一人しかいない

うえに、人材不足だ。そういうわけでこうして街まで出向いているのだが、なかなか見つからなくてねぇ・・・」
「それはもしかして、プロデューサーを探しているんですか？」
「ん？ああ、そうだが、よくわかったねぇ。それによくプロデューサーなんて言葉を知っているね。もしかして、芸能業界にかかわっていたりするのかい？」
「とりあえずフリープロデューサーですけど・・・所属はないです」
「ほう、それではぴったりじゃないか！キミにはなかなか才能を感じるよ。ティンときた！どうだい、765プロで働いてみる気はないかね？」
（てぃん？）
高木という人は目を輝かせて（黒くてよくわからないが）、是非にと推してくる。
「才能は、ないと思いますよ。期待に答えられないプレッシャーで、事務所という縛りから逃げただけですから。実力の裏付けがあってフリーをやってる人とは違いますし」
うっとうしい、という感情は不思議にも感じなかった。ただここも同じだと、日高はたかをくくっているのだ。
実力以上の期待をかけられるのはうんざりだ。そんなことは舞のプロデュース終了からずっと当たり前のようにあったことだ。新人二年目から時の人というふうに扱われ、皆はそれがすべて舞の実力だということなど知らず持ち上げる。だからもしここでプロデュース活動をするならば、自分の力が理解され、過度の期待をされないことが条件だと、日高は思っていた。
が、日高の自分を卑下するような言葉に対する、高木の返答は予想とは違っていた。
「プレッシャーから逃げたいならアイドルプロデューサーを辞めればいいじゃあないかね。それをしないということは、キミがこの仕事に誇りを持っている証拠だよ。それに私は、人選眼には自信があるのだよ。もしウチで働く気が起きたなら、アポはいらないから7

６５プロまで来てくれたまえ。地図を渡しておこう」
――――７６５プロはいつでもキミを待っているよ！
そう言って彼はその場を立ち去った。
変に心地よい期待をかけられた気分だった。

「・・・変な人ですね」
「やっぱりそう思うか？」
回想話を終えた千早の第一声は、予想の範疇をまったく射たものだった。のだが、
「いえ、その高木っていう人もそうですけど・・・あなたもですよ、日高さん」
「え、俺？」
それは予想していなかった。思わず素っ頓狂な声で聞き返す。
「ええ、だって口調が完全にその高木さんのこと信じ切っていましたよ？」
「・・・すごいな千早は。プロデューサーになれるんじゃないか？」
「遠慮しておきます」
「はっきり言うなあ・・・」
完璧に千早の言うとおりだった。日高は事実彼の言葉に人を信じさせる力があるように思っている。
「でも、よかったじゃないですか。事務所？は小さいみたいですけど」
「大きい小さいは関係ないさ。そこに夢を目指してる子がいるなら俺は自分のできる限りのことをする。それは変わらないからね」
そこまで言って、彼はふと千早のほうを見た。
「って、千早もそうだったな」
「私は、歌手が夢ですから。アイドルには興味ありませんし」
「わかってるよ。ただやっぱり力になれなかったなって悔しいだけだ」

「・・・本当に、変な人ですね。そうやって他人のために何でもできるって人、私は見たことないです」
「そうか？そんな珍しいものでもないと思うけど」
褒めてくれているらしいのだが、『変な人』扱いはそれほど嬉しいものではないな・・・。
「いえ、羨ましいです。私にできることといえば、未熟なこの歌しかありませんから」
「・・・千早？」
・・・また、あの顔だ。
苦痛に耐えて無理をしているような苦悶の表情ではなく、どちらかといえば胸の中でチクリと痛む棘がなかなか抜けないといったそれだ。
「いえ、ごめんなさい。ちょっとしゃべりすぎました。練習に戻らせてもらいますね」
「ん、頑張ってな」
『俺に出来ることはないか？』
なんて、軽々しく訊けるわけがない。あの千早の表情を見てしまったら。でも、できることなら何とかしてやりたい。
千早と同じように、胸中のしこりは次第に棘のようになって日高にも痛みを引き起こした。

日高が765プロの戸を叩いたのはその翌日のことだ。
「・・・あれ」
正確には戸を叩いても返事がなかったので、ノブを回したのは、と言いなおすのが妥当かもしれないが。
「すいませーん、誰かいませんかー？」
声をかけながら事務所内に歩を進める。不思議なことに、人の気配がしない。鍵が開いていたのに。

「～～～・・・♪」
「ん？」
いや、気配はある。というか声が聞こえた。
どうやら奥の別室に人がいるようだ。なんて不用心な。
先ほど出した声の大きさで気づかないほどだ。あまり大声を出しても意味がないだろう。それならこのドアを開けて直接声をかけたほうが効率がいい。それにこのあたりはちょっとした商店街のようになっている。あまり大声を出しすぎるのは迷惑だろうからな。
ガチャリ、と少し重い扉を開ける。
ピンク色のリボンが二つくっついた後頭部が見える。ドアに背を向けてソファに座っているその女の子は、イヤホンをつけてなにか口ずさんでいた。
これは、ＧＯ　ＭＹ　ＷＡＹ！かな？あまり音程が取れてないようだが・・・。
（いやいや、そうじゃない）
別にこの子を考察しに来たわけではない。早く声をかけなければ。
「あの、もしもし？」
「～～・・・？あれ、社長もう帰ってきたんで、す・・・？」
イヤホンをとって彼女が振り返る。そこから硬直までのスムーズな流れ。
・・・いやな予感がする。
ここは落ち着いて、刺激しないように接しなければ。
「あのさ、高木社長はいるかな？社長に呼ばれてここにきたんｄ」
「きゃぁぁああ！！？どっ、どどどどど泥棒さんですか！？どこから入ってきたんですかぁ！？」
すでに落ち着いてなかった！？
彼女は日高から最も離れた部屋の向かいに全速力で逃げ去った。
とはいえ場所の狭さが狭さなだけに、大した距離ではないが。
「いや、ちゃんと玄関から入ってきたよ。そうじゃなくて社長を・・・」

「えっとえっと、泥棒だから警察の１１０番！？じゃなくってそれは救急車だっけ！？」
「頼むから少し落ち着いて話を聞いてくれ！」
　そのうち混乱してどちらとも呼び出しかねない。あまりやりたくなかったが強硬手段をとるしかなさそうだ。ソファを飛び越え彼女に向かってダッシュ、しかるのちに携帯を握る手を止める。その時だった。
「春香ちゃん？何か大声出してたけどだいじょ、う・・・？」
「え・・・」
　事務制服を着た女性は、現状を見るなり少し考え込むような表情を見せ、そして言い放つ。
「おはようございます、あなたが社長の言っていたプロデューサーさんですね？」
「え？あ、はい」
「え？ぷ、ぷろでゅーさー？泥棒じゃなくて？」
「そうよ、春香ちゃん。大体泥棒に入るとして」
　女性はひとつ間をおき、そしてにこやかに、
「ここから何か盗っていけるものがあると思う？」
「・・・」
「・・・」
　彼女のいかにも間抜けそうで的を射た一言で、この騒ぎは幕を閉じた。

「はっはっは、すまないね。まだ始めたばかりの弱小事務所で、いろいろとやることがあって東奔西走しているのだが・・・如何せん前にも言ったように人材不足でね。事務所を空けることが多くなってしまうのだよ」
　それから十分程度して、高木が中心街から帰ってきた。昨日と同じように街中でスカウトしていたというが、成果は得られなかったようだ。

「それでもさすがに鍵を閉め忘れるのは・・・」
「戸締りは小鳥くんに任せていたんだがねぇ・・・彼女はしっかりしているんだがたまにこういう風におっちょこちょいなところが出てしまうみたいでな」
社長の言葉に、小鳥と呼ばれた事務員は顔を少し赤くした。
（いや、おっちょこちょいというレベルじゃないだろうこれは・・・）
もし本当に泥棒が入ってきたらどうするつもりだったのか。
「それはさておき、よく来てくれた。改めて、７６５芸能事務所社長、高木順一郎だ。そして彼女が事務の音無小鳥くん」
「先程はお騒がせしました。音無小鳥です」
「日高嶺司です。これからよろしくお願いします」
「彼女には今まで天海くんの世話も任せていた。簡単にでいいからあとで引き継いでおいてくれたまえ。・・・小鳥くん、書類の用意をしておいてくれないか」
「わかりました」
小鳥はそう言って会議室から出ていく。物腰の柔らかい人だ。社長の言っていた『しっかりしている』というのはうそではないようだ。
さて、と社長は話を正す。
「もうわかるとは思うが、キミの隣に座っている子が担当してもらうアイドル、天海春香くんだ。これからはアイドルとプロデューサー、二人三脚で頑張ってくれたまえ」
「あ、あの～さっきはごめんなさい・・・恥ずかしいところを見せちゃって・・・」
紹介を受けた直後、春香はバツの悪そうな顔で隣の日高を覗き見た。
「別にいいよ、勝手に入ってきた俺が悪かったわけだしな」
そう諭すも春香は口ごもる。じっと見ていると赤面したり青ざめたりと、本当に恥ずかしかったらしい。日高は遠慮がちに笑って場

を濁した。
「それじゃあ日高くん、私たちはキミを歓迎するよ。書類整理が終わったら早速天海くんとの活動を始めてほしい。ようこそ、765プロへ！」

書類整理は滞りなく終了し、日高は早速応接室（というか事務所の一部をカーテンで囲っているだけだが）にて活動を開始する。
対面のソファに春香を座らせ、自分はオフィスから持ってきた事務椅子に座った。
「それじゃ最初だし、ミーティングというか、軽く話そうか。お互いのことをほとんど知らないわけだしな、えっと・・・呼び方は春香、でいいのか？」
「うわひゃい！？は、はいそれで！」
「・・・もしかして緊張してる？」
ソファから跳ね上がりそうな勢いで背筋を伸ばし、目に見えてかたくなっている体から耳をつんざくような声が上がった。
「は、はい・・・少し」
「すこしどころじゃないぞ？大丈夫だよ、そんな堅苦しい話をするつもりないし」
「すいません・・・」
（困ったな・・・）
こんな調子じゃ距離なんて縮みやしない。どんな話題なら春香をリラックスさせられるか。
考え始めたとき、ふと先程見たプロフィールを思い出す。
「・・・ウチの娘がさ」
「・・・え？娘さん、ですか？」
「ああ、愛って言うんだけど、もうすぐ九歳になるんだ。ま、もうすぐって言っても二カ月ぐらい後の話だけど」

「はぁ・・・」
「それでさ、今年はちょっと趣向を変えて、いつもと違う場所でバースデーケーキを買ってやりたいんだけど、俺はそこのところあまり詳しくなくてね・・・。春香はいいケーキ屋、知ってたりしない？」
「え、あ、はい！知ってます！この辺のほうがいいですか？」
「ああ、よろしく頼むよ」
「それじゃまずは・・・わたしがよく行ってる商店街のケーキ屋さんで・・・」
甘いものが好きだというプロフィールの通り、春香は味の良し悪しからデコレーションやら値段やらを事小一時間ほどに渡って事細かに話し始めた。
好きなことを話すときの春香の表情からは、先程のかたさなど微塵も感じることはなかった。

余談だが、日高が普段利用していた場所は春香のお勧めには入っていなかった。
（・・・すまん、愛）

「・・・さ、そろそろ本題に入ろうか、春香」
「で、ここのチョコレートのデコレーションはすっごくかわいくてですね～・・・えと、ほんだいですか？」
「・・・やっぱり忘れてたか」
「・・・あ。・・・えへへ」
ペロッと舌をだして照れ笑い。なんというか、無邪気というべきなのかちょっと幼いというべきかわかりかねる表情だ。
「えっと、自己紹介、はしたから・・・あ、日高さんの呼び方はどうしましょう？」
「なんでもいいよ。日高さんでもプロデューサーでも」

それを聞いた春香は、『間をとってプロデューサーさんで』、と答えた。
その発想はなかった。まあいいか、別に不快なわけでもないし。
「で、お話ですよね？なんでも聞いてください！」
「そんなに構えなくても・・・じゃあ、春香はなんでアイドルになりたいんだ？」
「ぷ、プロデューサーさん、質問が難しいですよぅ・・・」
「そ、そうか？誰かに憧れたとか、こんな風になりたいからとか、そんな感じでいいんだぞ？」
頭のリボンが日高に少し近くなる。眉間にしわを寄せて、顔を少し伏せているのだ。
うーん、と少し唸るような声が聞こえてから、春香は顔を上げた。
「憧れなら、たくさんありますけど・・・全部話すと長くなっちゃいそうなんで。
・・・歌が好きだから、とかじゃだめですか？」

（『私、歌手になりたいんです』）

「なんていうかわたし、あんまり歌上手じゃないですけど・・・。わたし、歌を歌うのが大好きなんです！だから、わたしの歌で誰かが元気になってくれればいいなって思ったんです！」

（『そうやって他人のために何でもできるって人、私は見たことないです』）
（『羨ましいです。私にできることといえば、未熟なこの歌しかありませんから』）

春香の言葉につられて、千早の言葉が次々とフラッシュバックする。
どう考えても正反対の二人なのに、何故か思い出すこの言葉の本

質は・・・。
「・・・あの～、プロデューサーさーん？聞いてます？」
「・・・・・・え、うわっ？」
気がつくと、春香が心配そうに覗きこんでいる。
随分近くなっていた距離に対応しきれず、椅子から跳ね上がるのは日高の番だった。
「もうっ、プロデューサーさんってば急に黙っちゃったからどうしたのかな、って思っただけなのに、そんなに驚かなくても・・・」
「いや、ごめん。なんというか、既視感みたいなものが・・・」
「どーせありきたりな理由ですよぅ・・・」
「ちがう！そういう意味じゃなくて！」
ふてくされてしまった春香を必死になだめる日高。この誤解を解くために十分程度の時間を要した。
閑話休題。

「よ、よし。とりあえず俺の聞きたいことは聞いたし、次は春香の番だな。何か気になることとかないか？」
「んー・・・気になることといえば・・・プロデューサーさんの年齢とか、趣味とか？」
「お見合いじゃないんだから・・・まあ確かに突然気になることって言われても、そのぐらいしか出てこないか」
よく考えてみたらそりゃそうだよな、と苦笑い。日高の出した質問だって、初対面の担当アイドルとは必ずしている話だったし。
「えと、じゃあですね・・・プロデューサーさんはここに来る前には何をしてたんですか？」
「ん？そりゃ、プロデューサーだけど？」
そーじゃなくてですねっ、と春香は大きくかぶりを振った。
「どこの事務所で働いてた、とかどんなアイドルを担当してた、とかいろいろあるじゃないですかぁ！」
「うーん・・・」

――どうしたものか。
正直舞の事を話したくはない。だが舞を除いて六人のアイドルをプロデュースしてきたが、どの子も大体Cランク（メジャーアイドル）止まり。今後のことを考えると、春香に不安を与えないようにしたほうがいいのだろうか。
「・・・まーた考え込んじゃった。それじゃプロデューサーさん、今までプロデュースしてて一番楽しかったアイドルって言ったら答えられます？」
「うん、それだったらやっぱり舞かもな・・・・・・・ぁ？」
「え・・・？ま、舞ってあの・・・？」
いけない、口が滑った・・・。
しかし、舞がアイドルを引退したのは七・八年も前の話。
（春香が知ってる可能性は低いはず・・・！）
「ああ、CランクだったかBランクだったかで終わっちゃったけd」
「舞って・・・えっと、確かプロデューサーさんの名前って・・・」
「変な推理を巡らせんでもよろしい」
嘘口上など右から左。春香はしばらくぶつぶつと呟いてから、
「って、そんなわけないですよねー」
「すごい棒読みだな・・・はは」
「あはは・・・」

「しゃぁちょぉぉぉぉっっ！！！！」
「叫ぶなぁーっ！！そして走り去るなぁーっ！！」
765プロの空気は、数秒間だが二人の足音に支配された。

「ああ、知っていたよ」
「「・・・はい？」」
そろそろ窓際が紅く染まろうかという頃。
社長室のソファにもたれかかっていた高木の声に答えたのは二人

分の気の抜けたようなセリフだった。
「いや、知っているとも。私も少し前まではプロデューサーだったからね。そもそも業界人間だったら『日高舞』のプロデューサーを知らないわけがないだろう？」
「社長、知ってて黙ってたんですか！？ひどいですよー！」
春香の非難なぞどこ吹く風と、高木は高笑いするばかり。その横で小鳥は別段困ったというわけでもなく、ただやれやれといった身振り。高木の周囲の人間からすれば当たり前の光景なのだろう。
「それじゃあ、やっぱり俺が『日高舞のプロデューサーだった』から、あの時声をかけたんですか？」
しかし日高にとってそれは裏切られたようなものだ。自分の信じた言葉が上辺だけだったということになる。
「・・・日高くん、キミは私の言葉をもう忘れたのかね？」
「え？」
打って変わって落ち着いた調子の高木に、思わず声を上げる。その表情は街中で見たそれとも、先程までの『愉快な社長』のそれとも違う、765プロダクション社長として、部下に対するときのそれだった。
「『キミには才能を感じる』と。これは酷な話だが、プロデューサーという仕事は決して明るみに出ない『陰』の仕事だ。たとえばファンがアイドルを見たとして、それはすべてアイドルの実力、アイドルの功績だ。そしてそのプロデューサーの正確な実力を知っているのは、担当したアイドルだけ。つまりね・・・」
「あなたのプロデューサーとしての力は、まだ社長にもわからないってことですよ、日高さん」
「おぉ、こらこら、小鳥くん。私のセリフをとらないでくれたまえ」
「ふふ、ごめんなさい。はい、今日はお疲れ様です、日高さん」
いつから給湯室に行っていたのか、小鳥は高木の言葉を遮り、コーヒーの入った湯呑をテーブルに置いた。同じようにあと二人分を分ける（春香には別にジュースを入れた湯呑が手渡された）。

「あ、ありがとうございます小鳥さん。・・・でも社長、そんな適当な」
「適当なんかではないさ」高木は立ち上がり、少し胸をそらす。
「私にはこの目がある。昔から人を見る目『だけ』は自信があってね。私はキミに見える人間性を信じて勧誘した、それだけだよ。私はキミを、信頼しているからね」
「しゃちょぉ～、自慢げにしないで下さいよぉ・・・。その『人を見る目』の所為でずっとプロデューサーもアイドル候補生もいなかったんですからー」
「そうですよ社長！私たちがどれだけ人不足に喘いでたか・・・！」
「お、おぉ・・・？ひ、日高くん、私は今自分でもなかなかいいことを言ったと思うんだが、なぜ彼女らに怒られているのだろう？」
「・・・はは、あはははは！」
「ひ、日高くん！笑っていないで助けてくれたまえ！」
呆れる『アイドル』春香に、激昂する『事務員』小鳥、困惑する『社長』高木。
そしてねじが外れたように笑う『プロデューサー』日高。
これが彼ら、765プロの始まりである。
（そして、さっきから脳裏に映るもう一人・・・もし彼女がここに加わったなら・・・）
そんな空気の中で日高は一人、心を決めた。

「社長、ちょっといいですか？」
春香を帰し、書類を片し始めた日高は、自分にその権限がないことを思い出し、手を止めて高木に声をかける。
丁度業務も終わり、高木はオフィスで小鳥の入れたコーヒーをちびちびと口に含みながら休憩しているようだ。日高の声に「なにかね？」と短く応答した。

「いえ、初日から申し訳ないんですけど・・・アイドル候補生が一人増えるのは、事務所的に大丈夫でしょうか？」
「・・・それは、スカウトしたい子がいる、ということかね？」
「はい。勿論社長には一度見てもらうつもりですが、もしスカウトさせてもらえるなら、今から行ってこようと思うんです」
「うむ、その意欲はいいね！どんどんやってくれたまえ！」
「ありがとうございます。・・・まあ、アイドルには興味ないと前に一度言われてしまっているんですけどね、あはは」
　ごまかすように笑い、止めていた手を動かし始める。
「ふむ・・・要するにキミはその子を放っておけないのだね」
「・・・はい。今日確信しました。春香にはきっと彼女がいい刺激になるし、彼女にはきっと春香が・・・ああいう子が隣にいることが必要なんだと思って。勿論独り善がりなのは自覚してます。けどきっと私が彼女にできるのはそれぐらいしかないので」
「うむ、先程も言ったように、私はキミを信じている。765プロのプロデューサーはキミだ。アイドルのため、夢を追う子のために、自分の思うことを存分にやってくれたまえ！」
　高木の心からの言葉に日高は一礼し、事務所の扉を出た。
「いいんですか、社長？あんなこと言っちゃって。予算もそんなにないのに、ちょっと無責任な気もしますけど・・・」
「おお、小鳥くん。今日は御苦労さまだね」
　流しで湯呑を洗っていた小鳥が首だけひょこっと出して高木に問う。
「さっきも言った通り、765のプロデューサーは彼だ。そして社長は私。アイドルのために働くのがプロデューサーの役目ならば、それをなるべく円滑に運べるように策するのが社長の務めだよ。悪いけど小鳥くん、資金繰りの手伝いを頼むよ」
　快活に笑う高木にひとつ溜息をもらし、小鳥は流しに視線を戻す。
（ま、わかってましたけどね）
　影で見えないが、口元には笑みが浮かんでいるようにも見えた。

カン、カンと連続する金属音。７６５プロから続く階段を下りて、日高はひとつ深呼吸。
（そういえばスカウトするのって、初めてなんだよなぁ・・・）
「どうしたんですかプロデューサーさん。暗い顔ですよ？」
「ああ、春香が気にするようなことじゃ・・・春香？」
「はい。プロデューサーさん出てくるの遅いですよぉ！」
「え、なんだ俺を待ってたのか？何か訊き忘れたことでもあったか？」
違います、と日高の言葉を一蹴し、よくわからない方向を指さした。
「さ、行きましょう！」
「はい？」
「はい？じゃなくって！プロデューサーさん、今から如月さんのところに行くんですよね？」
ああ、うん。日高は生返事。春香はどこか楽しそうに今にも走りださんとしている。
――ああ、そういえばさっきちょっと話したっけなぁ。
公園で如月千早という歌が上手い女の子と話したことを思い出した、と確かその程度しか話してなかったような気がするが、それにしてもこの春香の高揚っぷりは一体なんなのか。
「プロデューサーさーん、早く連れてってくださいよ～！」
「いや待て春香。お前なんでそんなに楽しそうなんだ？」
「だって、歌が上手なんですよね、その子」
「うん、まあ」
『春香よりは』と言いかけて寸でのところで止める。
「プロデューサーさんが何度も聞きに行くような歌だし、わたしも聞いてみたいなって思って。連れてってくれますよね？」

「うん、まあ・・・俺に断る理由はないからいいけど・・・」
千早がなんて言うだろうか・・・。第一ここ最近ずっと彼女の邪魔してる気がするし。
出始めに日高の漏らした溜息の意味を、春香は知らない。

「・・・ん、あー、あ～」
喉の調子を確かめ、千早はひとつ息を吐いた。
（ちょっと、声を出しすぎたかしら）
練習を中断するのは気乗りしないが、喉を壊しては元も子もない。千早は自販機まで歩いてゆき、入金相応のボトル茶を拾い上げた。
（そういえば、今日は来ないのかしら？）
ここ最近ベンチに見る影が今日はない。まあいないならいないで練習に専念するだけの話なのだが、何か物足りないような気もする。
だが彼のおかげで練習の量が少なくなっているのも事実。今のうちに詰めておかないと、と千早は休憩もそこそこに立ち上がる。
「お、と。今から始めるのか？」
が、それはいつもの声に阻まれた。
「・・・こんばんは」
「う・・・いや悪い。気にしないで続けてくれ」
別に嫌なわけではないが、出鼻を挫かれて千早は少し不機嫌そうに挨拶を返した。
「うわ、綺麗な人ですねぇ・・・」
日高の隣にはどこか気の抜けたような表情をした春香。千早は彼女を示して、
「・・・日高さん、そちらの人は？」と尋ねる。
「ああ、紹介するよ。この子は天海春香、これから俺が担当するアイドル候補生だ」
「あ、あのっ、天海春香です！あなたが・・・如月さん？」

「はい、そうですけど」
そっけなく答えて、二人にベンチを勧める。
「ごめんな、ちょっと話したらこの子、どうしても千早の歌を聴いてみたいって聞かなくてさ」
「それは、別に構いませんけど・・・私の歌は、まだ人に聞いてもらえるほどのものでは」
「別に歌わなくても、発声練習でもなんでも千早がいつもやっていることをやってくれればいいからさ」
「はぁ・・・」
何が楽しいんだろう、と首をかしげながらも、千早は楽譜を片手に広場へ戻る。
例のごとくうしろの自販機からジュースを二本持って、日高はベンチに座りなおした。
「プロデューサーさん、プロデューサーさん」
「うん？」春香は千早を気遣ってか少し小声で日高に話しかける。
「如月さんって、すっごく綺麗ですね・・・それになんか大人っぽいし。如月さんっていくつなんですか？」
「いや、それは聞いてないから何とも・・・春香と同い年ぐらいなんじゃないかな、背丈とかで判断するなら。ほい、スポドリでいいかな？」
「あ、ありがとうございます」
くるくるとキャップを外して、一口飲もうと傾ける。が、その動作は千早の歌声によって止められた。
「こ、声も綺麗・・・それに、とっても上手・・・」
「ん、そうだな」
春香のきらきらとした目はじっと千早を見つめていた。注目を受けている当人は歌っている最中だからか、たいして気にも留めずに歌い続ける。
（さすがに三日連続で聴いていれば、この引っかかりの原因もわかるかと思ったが・・・）

全然わからない。千早のこの異様な無表情はもっと深くに原因があるということだろうか。
それが俺は、千早が春香と組むことで何か変わると思っている。正反対なのに、いやだからこそ。
彼女らの根っこは同じなのだ。歌に対する『真摯な思い』は二人とも同じで、それが別の方向に向かっているんだ。少なくとも日高はそう感じている。
彼女らは『繋がった正反対』だと。
「あ、あの！わたしすっごく感動しました！！」
「え？あの、天海さん・・・？」
「・・・え？ちょっ、春香何してるんだ！？千早の邪魔しちゃだめだろ！」
「いえ、一曲歌い終わった後ですから、それは大丈夫です。けど・・・一体どうしたんですか？」
気がつくと隣に春香がいない。慌てて声のしたほうに顔を向ければ、そこには千早の超至近距離に、両手を掴んで詰め寄る春香の姿があった。
「如月さん歌すごい上手で、聴いててずっとドキドキしてたんです！あの、如月さん、アイドルなんてなってみる気ないですか？わたし、あなたと一緒に歌いたいんです！」
それは俺の役目なんだが・・・。
「・・・ごめんなさい。私、アイドルには興味がないんです」
「そ、そうですか・・・」
「いや千早、少しだけ考えてみてくれないかな？アイドル候補生として765プロに入ってほしいんだ」
「ぷ、プロデューサーさん、如月さんはさっき・・・」
「日高さんまで・・・私、前にも言ったと思いますけど・・・」
ああ、その通りだ。と日高。だがな、と続ける。
「こうして独学でずっとやっているよりは、ボーカルアイドルとしてちゃんとした施設で力をつけるべきだと思うんだ。その力を荒削

りにするのは、悪いとは言わないけど、もったいないと俺は思う」
「し、しかし私は・・・純粋に歌を歌いたいだけなんです。アイドルを馬鹿にするわけじゃないですけど、アイドルの世界は純粋な歌の勝負ではないですし」
「そ、そんなこと・・・ないわけじゃないけど・・・うぅ、プロデューサーさぁん！」
「・・・どうしても、考えてはもらえないのかな？」
力なく口を開く日高に、千早は首を縦に振った。
「ごめんなさい。どうしても私は歌手になりたいんです」
「そっか・・・つまらないこと訊いてごめんな。そろそろ俺は帰るよ」
春香、行こうか。そう言って日高は春香を連れ歩く。春香は終始しかめっ面を崩さなかったが、広場の出口に着いたあたりで、ぱっと顔を上げる。
（・・・！ティンときた！！）
「もう、『日高舞の元プロデューサー』さんでも、できないことはあるんですね！！！」
「はっ！？春香！？何を大声で・・・」
「え・・・『日高舞の元プロデューサー』？」
（ば、馬鹿！突然何言ってるんだ！そんなこと今は関係・・・ん？）
春香の顔には先程の相ではなく、まるでいたずらに成功したちびっこのような、そんな表情があった。その顔に面喰って、日高は毒気を抜かれた。
「ひ、日高さん・・・今の話は、本当ですか？」
「え、千早・・・？」
「本当ですよ、如月さん！この人は、八年前ぐらいに引退した伝説のアイドル『日高舞』のプロデューサーだったんですよーっ！！」
「春香、一体何考えて・・・？」
「プロデューサーさんは嫌がってましたけども」
「え？」

春香は日高に向かって満面の笑顔を作り、
「こういう使い方なら、いいですよね？」と囁いた。
（『日高舞』・・・あの伝説の歌姫を、間近で見ていた人・・・）
そして事は春香の思い通りに運ぶことになる。
「日高さん、先程の話ですが、やはり受けさせてもらっていいでしょうか」
「え、いやでも・・・プロデューサーだったってだけだ。舞の実力に俺は関わってないぞ」
「それでも、きっと得られるものはあるような気がします。日高舞の歌は何度も聴いてました。私の、憧れですから」
「本当に、いいのか？」
日高は心配そうに問うが、千早の意思は固い。
（そういうふうに見られるのは、心が痛むんだが・・・）
だがまあ、今回はよしとしておこう。気は進まないが結果的に千早のスカウトに成功したわけだし。
それに、力が足りないと自覚しているのならそれをこれから補えばいい。春香と千早の期待に応えられるように。
「そっか、わかった。来週の土曜、昼の一時に765プロ・・・えっと、社長にこの前渡された地図があったな。ここまで来てくれ。ほら、春香。改めて挨拶しとけ」
「は、はい！わたし、天海春香、16才です！まだあんまり上手じゃないけど・・・歌が好きなことなら絶対に負けませんから、これからよろしくお願いします！」
よほどうれしいのか、日高を押しのけてずいと前に出る。相変わらず目はきらきらと輝きを放ったままだ。
（本当に、千早の歌に惹かれたみたいだな・・・）
これから共に活動する上で、少し心配になる日高。
「如月千早、15才です。歌以外には興味はありませんが、歌うチャンスができるならば何でもするつもりです。これからよろしく、天海さん」

ピシィッ！

音まで聞こえてきそうなぐらいわかりやすく固まる春香。

「え、え、と・・・年下ぁ！？」

「あ、天海さん！？どうしたの！？」

「本当に、大丈夫か・・・？」

何かにショックを受けてへたり込む春香に戸惑う千早。

今からこんなことで、『ユニット』として活動していけるのだろうか・・・。

今後を思い、本気で心配する日高であった。

その2『e-S誕生』（前書き）

今回は前回から一週間後の話です。
ユニット名にセンスがないのは気にしないでね？（迫真
春香と千早の共通点と相違点、演出するにはまだまだ腕が足りませんが、甘めの採点で読んでいただければなと思っております。

あ、あとひとつ注意書きとして、日高Pの名前は嶺司（れいじ）と読みます。
動画の視聴者様から賜った名前です。感謝感謝。

その2『e' S誕生』

四月中旬、土曜日。

日高の朝は早い。

朝の四時に起きて着替え、早朝の散歩を楽しむ。

まだ温まりきってない空気を受けて頭を醒ます。日高の家がある住宅街から765プロの反対側に出ると、千早に初めて会った公園に出る。

千早の歌を聴いた広場を回り、煉瓦色の歩道を、脇に生い茂る樹木を見ながらぶらぶらと出口に向かって歩く。

（今日から、始まりだな）

先週起こったことを鮮明に思い出した日高は、気合いを入れなおすかのように大きな伸びをひとつ。そうして我が家へと帰ればそこには舞の作ってくれた朝食が、

「ないわよ」

「ですよねー」

元伝説のアイドルにして日高嶺司の妻、日高舞はエプロンを身につけながら、彼の応答にふぅ、と溜息をもらした。

「あのね、まだ五時よ？出来てるわけがないでしょう」

「ん、まあそうか」

外はようやく日が差してきたが、舞の示す通り時計の短針は「5」の少し前にある。

「って、舞はなんでもう起きてるんだ？」

「愛がね、今日早く起こせって言うんだもの」

「なにかあったっけ？」

「日直。前日直のときに遅刻して怒られたから、気にしてるんじゃない？それにあなただって、今日は早く起きると思ってね」

「なんで」
「自分の部屋に行ってカレンダーでも見てきなさいな。あんなに力強くマークしてあれば、誰だって今日何かあるって思うわよ」
こうマジックで何度もぐるぐる、と舞は人差し指を動かしてみせる。
今日が初日なんでしょ？と付け加えてから、彼女はキッチンへと移動した。
「初日は先週だけどな」
「あなたにとっての初日は今日なんでしょ？前より酷くなってるわよ、プロデュース初日に早く起きる癖。前回は五時半だったのに」
「一時間半ぐらい、大して変わらないよ」そう呟いて日高はダイニングの椅子に腰を下ろした。
初日であるなら気合いが入って早く起きることなど当たり前、と日高は思っているが、舞はそれが心配らしい。そりゃあ心配にもなるだろう。
今回――――つまり昨日の場合、日高が最後に起きているのを舞が確認したのは深夜一時。そこからすぐ寝たとしても三時間の睡眠しか取っていないのだ。それでいてこのすっきりとした表情は一体何なのか。
（愛も、こういうところは嶺司さんに似てほしかったわ）
到底似通わない二階のねぼすけを思い「ふふっ」と笑みをこぼした。

（・・・やっぱり早かったか）
まだ早いという舞の制止を振り切り、まだ人もまばらな道路を行った結果がこれだ。
誰かもう来ているだろう、と思っていたのだが、７６５プロからは光の一筋も漏れてはいない。

「出直すかな・・・」
そうして自宅へと踵を返したその時、上空から声が降りかかる。
「あれ？プロデューサーさん！」
それは間違いようもなく春香の声だった。振り返ってみると階段を下りて、
「おっはようござ、い、うわったった・・・！」
今にも転びそうな・・・転んだ春香の姿があった。
「あいたたた・・・もー、プロデューサーさんも見てたなら助けてくださいよーっ！」
「悪い悪い・・・いやそうじゃなくて、なんで春香がこんな時間に？今日は昼一時からって言っただろ？」
幸い怪我はしていないらしい。驚異の防御力だな、などと感心しつつ日高は軽く打ったらしい頭をさすってやる。
「えへへ・・・だってわたし、今日がすっごく楽しみで仕方なくって！もう昨日の夜なんて眠れなかったぐらいで・・・今もちょっと眠いです・・・ふぁぁ」
「んー、女の子が夜更かしはよくないんじゃないか？」
「それはそうなんですけど・・・それよりプロデューサーさんはなんで帰ろうとしたんですか？せっかく来たんだし、事務所入っちゃえばいいのに」
「そうしたいのは山々なんだがな、鍵、開いてたか？」
そう言って事務所の扉を指さすと、春香はふるふると首を振った。
やはり開いていないらしい。もしかしたらまたおっちょこちょいをやらかしてくれるかと思ったが、そう上手い具合に都合よく行くはずもなく。
「それじゃあ入れないな。俺は鍵渡されてないから」
「えーっ！！？そ、それじゃあわたしはどうすれば！？まだ朝の七時だから、小鳥さんだって来ないのに！？」
「え、なに？小鳥さんってそんなに来るの遅いのか？」
「二週間に一回社長に軽く怒られるぐらいには」

日高は肩を落とす。全然しっかりしてないじゃないか・・・。
しかしそんな愚痴など言ってられない。春香は眠たそうだが事務所の扉に寄りかかって寝かせるわけにもいかない。
「仕方ない、春香。ちょっと歩こうか」
「んぅ～・・・？どこにですかぁ～？」
「まあまあ、ついてくればわかるよ」
そうして日高は眠い目をこする春香を連れて来た道を戻り始めた。

「・・・で？」
舞は今の言葉をさっぱり理解できない、といったふうに棘のある言葉を返した。
「いやだからさ、春香に舞のベッド使わせてやってくれないか？」
日高と同じく玄関で棒立ちにされている春香は状況が飲み込めていないのか、たまに首をかしげては小さくあくび。
それを見た舞はため息交じりに「とにかく、上がらせちゃって」と呟いた。

「いいの？担当アイドルを家に連れ込んじゃって」
「人聞きの悪いことを言うなよ・・・まあ確かに言ってしまえばその通りだけど」
事務所が開いてなかったんだ、と言うとそれ見たことかとでも言いたげに不敵な笑みを見せた舞は、無言でキッチンへと戻り、二人分のコーヒーを淹れる。
朝七時半。本当の光景はこうでなければいけない。春香を舞の部屋へと連れて行った日高はテーブルの前へと腰を下ろした。春香は結局何もわからないままにベッドへと倒れこみ、すぐさま深い眠りへと沈んでいったが・・・まあ起きた時に説明すれば大丈夫か。
「そういえば愛はもう学校か」

「入れ違いみたいにして出て行ったわよ。学校は反対側だから、あなたは見なかったかもしれないけど。そんなに早く出なくてもよかったのにね。・・・はい」
ありがとう、と一言。そうしてから舞の差し出したコーヒーを一口啜った。
「で、春香ちゃんだっけ？どうするのよあの子。寝かせたはいいけど、あれじゃしばらく起きないわよ？」
「とりあえず八時まで様子を見て、起こしても起きないようだったら俺は事務所に行かなくちゃいけないから・・・」
「・・・私に面倒を見ろ、と」
「・・・ダメか？」
「別にダメっていうわけじゃないわよ。それで何すればいいの？」
んー、と唸ってから日高は手帳を取り出し、空欄のページを一枚破る。
メモを一枚書き終えた日高は、出るときに枕元にでも置いておくよ、と二つ折りにしてテーブルのわきに置いた。
「ちょくちょく様子見てさ、もし起きたらこのメモに目を通すように言ってやってくれ。・・・と、もう八時か。ちょっと様子見てくるよ」
「その前にひとつ聞いていい？」
舞の部屋へ向かおうとする日高を引き留め、
「なんで愛の部屋じゃないの？」
「・・・まあ、いろいろ散らばってるだろうからな」
「勿論、手伝ってくれるんでしょ？」
「・・・」
願いを聞いてもらう立場の日高に拒否権はなく、手伝いという名の一人作業に二十分程度を要した。
尚、事務所まで三十分、それからさらに十分経ってからやっと事務所の鍵が開くことになるのを日高はまだ知らない。

（ん～・・・ふかふか～・・・『ふかふか』？）
右半身の感触は春香の靄がかかった頭にかすかな疑問を提示した。
それでも体を起こすことを頭は拒否しているようで、仕方なしに薄く瞼を上げてみる。
窓からは日が射しており、春香に周囲の状況を確認するに足る明るさで、それによってまず浮かんだのは、
「・・・ん～・・・？」
ここ、どこ？
疑問に対する答えではなく、さらに重なった疑問だった。少なくとも春香には全く見覚えのないこの光景がどうして目の前にあるのか。
とりあえず事務所にベッドはない。事務所のソファなんてスプリングが伸びきって寝心地なんて言ってられない座り心地なのに、『ふかふか』みたいな感想が出るはずがない。手を伸ばしてあたりを探ってみれば、体にはご丁寧にタオルケットまでかかっている。
（えーっと確か、電車で事務所まで来たのが七時で・・・プロデューサーさんに会って、それから・・・？）
寝起きの頭を精一杯働かせても思い出せるのはそこまでで、とにかく起きようとタオルケットを退かしたその時、部屋のドアがゆっくり開いた。
「あらおはよ。気分はどぉ？」
「・・・え？」
エプロンをつけた彼女は近寄るなりベッドの縁に座って春香を覗きこむ。
（あれ、あれ・・・？この人、すっごく・・・）
「まだ眠い？でももう十一時なんだけど。そろそろ起きたほうがいいんじゃない？」
「・・・あぁ」

・・・なるほど、夢だ。
よく覚えてない部屋のふかふかベッドで寝てて、起きたら『日高舞』にとんでもなく似てる人が目の前に来るなんて、こんなにわかりやすい夢もそうない。
「起きなさい」
「はい・・・」
枕に顔を埋め二度寝の体勢を取ろうとした春香を舞の一言が止める。
春香の意識が完全に覚醒したのがこの瞬間だったことは言うまでもない。

「日高くん、そろそろ休憩にしよう」
「あ、はい」
高木の一声で日高はペンを動かしていた手を止める。デスクに置いた携帯をとって開いてみるが、着信はない。
（まだ起きてないのか・・・？）
春香を寝かせてからすでに四時間程度経過している。集合時間は十三時だから問題ないのだが、やはり様子を見に行ったほうがいいだろうか。どうせ迎えに行くのだし。
「せっかくの昼休みだ。どうだい、これからみんなで、下のたるき亭で食事でもしないかね？」
「みんなで、ですか・・・」
そんな日高に高木は親睦を深めんとするため昼食の誘いを切り出した。
たるき亭とは、７６５プロビルの一階に入っている食事処である。ランチタイムしか営業していない上客入りも目を見張るようなものはなく、それでいて破格の安さをさりげなく提示している。
たるき亭自体は７６５プロが出来る前からあるのだが、それまで

もそのような感じだったため何故営業が成り立っているのかなどと、いろいろ謎が多い場所である。
「おごりですか、社長！？」
会議室から駆け付けた（と言ってもドアをひとつ開けるだけだが）小鳥はそれだったら是非！と目を輝かせる。
「も、勿論だとも」とのたまった後、高木は自分の財布を取り出して溜息。舞い上がっている小鳥にその表情は見えていない。
「日高くんはどうするかね？」
「お誘いはありがたいんですけど、ちょっとこれから外に出る用事があるので、今回は遠慮させてもらいますね」
広げた資料はそのままに、財布を持って立ち上がる。
〜〜〜♪
丁度ポケットに入れようとしていた携帯から着信音が鳴り響く。通話ボタンを押しながら日高は事務所を後にした。

バスで住宅街を抜けて、765プロの前をしばらく行くと、中心街――日高と高木が初めて会った街に出る。都会のような雰囲気のこの街ではカフェやらレストランやらと横文字が多い。
日高と並んで歩いていた春香はその街並みを眺めながら「うわー・・・なんかおしゃれですね〜」などと田舎者のようなセリフを放った。
「あれ、春香このあたり詳しいんじゃないのか？前ケーキ屋のことは結構詳しく教えてくれてたけど」
「わたしが詳しいのはケーキ屋さんだけですよ？このあたりにはあまり来ませんし」
「ん？ショッピングとかで高校の友達とかと来たりしないのか？」
「しませんよ〜。だって家遠いですし。電車で二時間ぐらいしないと来れませんから」

「そんなに遠いと通勤も大変・・・ちょっと待て、二時間？」
あれ、社長から聞いてませんか？と春香は知っていると思っていたのか不思議そうに首を傾げる。
事務所で春香を見たのが朝の七時。通勤に二時間弱かかるとしたら・・・始発がぎりぎり出てるか出てないかという時間帯だ。
人間、睡眠時間が足りなくても意外と活動できるということだろうか、とこっそり自分を正当化しつつ、昼食をとる場所を探す。
「プロデューサーさんどうしたんですか？そんなにきょろきょろして」
「んー？もう昼時だからさ、昼食を取らないと。春香はどこで食べたいとか希望あるか？」
「え？そ、そんな悪いですよ！お昼は自分でお弁当を作って・・・」
そう叫んでかばんの中を探るが、それらしいものは一向に出てこない。
「・・・来ようと思ってたんですけど・・・」
「あれだけ早く家を出たなら、時間はないよな」
日高の指摘を受けて顔を赤くする。
「うーん、こんなことならもう少し集合時間早めて、千早も一緒に食べればよかったなぁ」
「それだったら、一度事務所に戻って如月さん・・・えっと、なんか言いにくいなぁ。千早ちゃんを待ってみたらどうですか？もう十二時だから、ご飯食べてると遅れちゃうかも」
「それもそうか。ファミレスでミーティングっていうのも何か締まらないものがあるけど・・・それじゃあどこでやるか目星をつけておかないと。もう一度ここにきて迷うのも時間の無駄だし。でも春香、一時間も待てるか？寝るとすごく体力使うって聞いたことあるけど」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「あはは・・・」

紅潮した頬をさらに赤らめながらも、春香は苦笑という形で反応を返した。
「オーケー、それじゃあシュークリームでも買って戻ろうか。千早と、社長や小鳥さんの分も買って帰らないとな」
「はいっ！あ、シュークリームがおいしいお店はですね～・・・」
目を爛々と輝かせながら迷うことなくナビゲートを始める春香。
しまいには置いて行かれた日高を、
「プロデューサーさん、ここですよ、ここ！！」
などと春香が大声で呼びつける。
街から出る直前まで二人は一般大衆から奇異の目を向けられることとなった。

「こんにちは」
十三時。時間丁度に千早は765のドアノブを回す。
「あ、失礼しました・・・えっと？申し訳ありませんけど、お名前を頂戴してもよろしいですか？」
彼女を出迎えたのは、カーテンで仕切られた向こう側の空間から突然現れた、この狭い室内で何故かインカムをつけた女性だった。
「如月、千早です。日高さんからのスカウトを受けてきたんですけど・・・」
「スカウト・・・ああ、先週日高さんが言ってた子！ちょっと待っててくださいね～」
「え、あの、ちょっと・・・？」
早々と奥の別室へ立ち去って行った彼女には、千早の声など届いていないようだった。戸惑ったような声は虚空に空しく響いて消える。
（・・・それにしても、なんというか・・・小さいところだけど）
こんなところでアイドルを始めたとして、自分の目指すものは見

えるのか。千早は早速不安になるが、先週聞いた言葉を思い出して、決意を新たにする。
（彼の下にいることで、少しでも『日高舞』に近づけるなら・・・）
あの伝説的ボーカルアイドル『日高舞』の元プロデューサーである彼から、何かを吸収することができれば・・・あるいは私にとって代え難い経験になるかもしれない。
「おお、キミが日高くんの言っていた子かね？初めまして、になるかな。私がこのプロダクションの社長、高木順一朗だ。以後、よろしく頼むよ？」
「如月千早です、よろしくお願いします。ところで・・・日高さんはどこに？十三時集合だと言われたのですが」
「ああ、日高くんは先程中心街から帰ってきたところでね、これから彼の買ってきたシュークリームを食べようかとしていたところだ」
よく見ると真っ黒な中で一点、白い部分がよく目立つ場所がある。なるほどあそこが口なのだろう、と千早は一人よくわからない納得を示した。
「すいません社長、遅れました！っと、おはよう千早。よく来てくれたな」
「こんにちは日高さん。今回はありがとうございます」
「うん、これからよろしくな！・・・まあ、立ち話もなんだし、とりあえずこれでも食べるか？」
日高の差し出したシュークリームを遠慮がちに両手で覆うようにして受け取り、会議室へと移動。そこには・・・。
「ぷ、ぷろでゅーさーさん！！早くティッシュ取ってください、ティッシュ！」
「いや、この部屋探したけど見つからなかったろう！？ちょっと取ってくるから待ってろ！」
シューから次々とあふれてくるカスタードクリームと格闘する先週の少女の姿があった。
「・・・」

「ふぁ、ちふぁやちゃんおふぁよー！！」
「だぁー春香っ！しゃべるな！こぼれそうだから！」
・・・本当にここで、何か得られるものがあるのだろうか？
当然のごとくそんな疑問を抱く千早。

その数十秒後、千早の口元でも同じ格闘が繰り広げられることになる。

「これから二人には、ユニットとして活動してもらうことになる」
「ゆにっと、ですか？」
日高の言葉に千早が訊き返す。ユニットという言葉がどうにも聞き慣れないらしい。
その横で春香は、胸のあたりまでしかない小さめのもの（？）だがいかにも甘々しいチョコレートサンデーにスプーンを差し込んでいた。
「春香ー？聞いてるかー？お前と千早が一緒に歌うんだぞー」
「ふぁーい、聞いてますよ〜？」
さっき甘いものを食べたばっかりなのに、よくもまあそんなに入るものだと感心する。
「私が、天海さんと・・・ですか？」
「千早ちゃん、呼び捨てでいいよ？年だってそんなに違わないでしょ？」
「あ、ええ・・・それじゃあ『春香』でいいかしら」
「うん、そのほうがいいよ！これからユニットとして一緒に頑張るんだから！」
「・・・ええ、そうね」
・・・一人で歌いたいのだけど、あまり出しゃばるのはよくないわよね。

「千早ちゃんと歌うの、楽しみだな～♪」と満足げな春香を他所に千早はどこか不満そうな表情を隠しつつ、置いてあるドリンクに手を伸ばした。
「んーでも、なんでユニットなんです？765プロのアイドルってわたしたちだけですし、別々のほうがいいんじゃないですかね？」
「いや、765プロはまだアイドルを一人も出してない事務所だからな。別々に出すよりユニットを組んでインパクトをとるほうが大事だ。一人より二人。オーディションを勝ち抜く可能性も増えるだろうし、それに」
一呼吸溜めてから日高は二人を見比べながら「お前たちがユニットを組むと、面白そうだからな」と口元に笑みを浮かべながら。
「お、面白い・・・？」
「プロデューサーさん、理由になってないですよー」
「いいのいいの。そのうちわかるからさ。それよりこれから売り出していくにあたってユニット名を決めておかないとな」
そうして日高は手帳を取り出すと、空白のページを線で二分し、その中央に『春香』『千早』と書いてそれぞれを円で囲った。
「出来るだけ二人のイメージにあった名前を付けたいんだけど、俺一人じゃ知ってること少ないし、どうしても限界があるからな。そこに二人で趣味とか特技とか、好きな色でもなんでもいいから書き出してくれ。ユニット名はそれに沿って決めよう」

「・・・み、見事にばらばらだな・・・」
銀色のスプーンがカラン、と底で音を立てると同時に、二人は紙を日高へと返した。
好きな色はピンクと青。趣味はお菓子作りと音楽鑑賞。イメージは元気と冷静。唯一の接点は『歌』という一点のみで、ある程度の予感はしていたものの、日高は頭を抱えた。
「これじゃちょっと難しいな・・・何か、他に何かないか？こう一発でイメージできてアイドルっぽいやつ！」

「そんなこと言われても・・・大体、アイドルっぽいってどんなのですかぁ！」
「でも、確かに・・・まったくの逆ね、私たち」
千早が感慨深そうに言ったその言葉はさらに日高を悩ませる。その目の前で春香は「やっぱり横文字ですよね！そうなんですよね！」とよくわからない一人合点を繰り広げていた。
千早は改めてメモを取り上げて眺めてみる。やけに大きく書かれた二人の名前の下に、スペースが圧迫されるほど書き込んでいる春香と、逆にまだ倍ぐらい書き込めるスペースを残している千早。
性格もイメージも全く違うこの二人で接点を見つけようと言うのもなかなか苦労する話だ。
（・・・横文字？）
ふと春香の言葉を思い出した千早は、メモを左から右へ舐めるように見つめる。
『千早春香好きなもの甘いもの好きなものクラシック音楽好きな色ピンク好きな・・・』
「・・・『早春』？」
「・・・千早、それはちょっと・・・」
「なんかアイドルっぽくないかも？」
「違うわ。ほら、こうして書くと・・・」
二人は怪訝そうな顔をするが、それとは関係なく千早は持っていたメモを裏返し、そこに
『千早　春香』
と離して大きく書き込んだ。
「で、ここととここを消して・・・」
『■早　春■』
「千」と「香」、この二文字を千早はがしゃがしゃと塗りつぶし、そこに出てきたのは、先程千早の呟いた『早春』という文字だった。
「あー、確かに。全然気付かなかった」
「えっと、英語で言うと・・・ｅａｒｌｙ　Ｓｐｒｉｎｇ？」

「じゃあ頭文字でも取ってみるか？」
「あ、それだったらこっちのほうがいいですよー」
日高によって『Ｅ　Ｓ』という文字が書き出され、そこに春香が加筆した結果。
「『ｅ－Ｓ』か、いいじゃないか。おしゃれな感じになったな・・・ところでこれ、何て読むんだ？」
「『エス』？それとも『イーズ』？ね、千早ちゃん。これって何て読むのかな？」
千早は首を傾げながら「何て読むのかしら」としれっと言い放ったのち、ストローを咥える。
「ち、千早ちゃ～ん・・・もう少し考えてくれても・・・」
「思いつきで言ったことがまさかこうなるなんて思わなかったから、何も考えてないのよ」
「ん～、さっき春香の提案した『エス』はよさそうなんだが、確かそんなタイトルの映画があったような気がするからＮＧだし・・・」
「なんで映画と同じだとダメなんです？」
「いや映画と同じってだけならいいんだが・・・ちょっとその内容がえぐいやつでさ・・・前に舞が借りて来たのを愛が見て、眠れなくなったって聞いたことあるんだよ」
それを聞いた春香の顔がみるみる青ざめていく。
「ほっ、ホラーですか？わ、わたし別のがいいです！」
「春香は怖いのダメなの？」
「やめて千早ちゃん！怖いとか一番思い出しちゃだめなの！！うぁーんっ、昨日見たのが蘇ってくるぅーっ！」
「な、なんで見たの・・・？」
グラスを丁寧に退かしながらテーブルに突っ伏す春香にどうしたらいいのかと千早はあたふたしながら手を空に泳がせる。日高は「千早、放っておいて大丈夫だよ」と呆れ気味に一言。
「怖いもの見たさってやつじゃないか？ウチの愛もそれで眠れなくなってたし。でも確かあれはホラーじゃなかったような気が・・・」

スプラッターは大丈夫なのにホラーが苦手な舞がまさかホラーを借りてくるわけがない、と日高は断言できる。
昔舞がそれを苦手とすることを知らず、借りて来た典型的ホラー映画を起動した瞬間、舞がソファの裏側に隠れてちょこちょこ顔を覗かせていたのはいい思い出だ。はたして今でもそうかはわからないが、とりあえず得意ではないだろう。
基準がよくわからない上に普段とのギャップが凄まじいのだが・・・そう考えるとそういうところは、舞と愛では似ていない。
「じゃあ『イーズ』でいいんじゃないですか？語呂もよさそうですし」隣で鳥肌を静めている春香の代わりに、千早が答える。
「んー、もう少しキリよく『イズ』もいいかもなぁ・・・まあ、今そこで悩んでても仕方ないし二人に決めてもらおう。春香、千早。どっちがいいかな？」
「私は、どちらでも」
「・・・・・・」
「・・・春香？」
「・・・あっ、え、えと『イーズ』はなんかそのまんまですよね！わたしは『イズ』がいいなぁ～！」
「ど、どうした春香？声が上ずってるぞ？」
「ごっごめんなさい、ちょっとぼーっとしちゃって・・・」
「春香、大丈夫？」
心配そうに覗きこむ千早に春香は勢いよく頷く。
「んー、大丈夫ならいいんだけど。やっぱり寝不足なんじゃないか？」
「だいじょーぶですよ、わたしちゃんと寝ましたもん！」
「はは、これから夜更かしはしないようにな。それじゃあ二人のユニット名は今日から『e-S』だ。二人はこれからアイドルユニットとして活動していくことになる。千早も春香も歌がアピールポイントなわけだし、俺としては歌番組をなるべく仕事として選びたいと思う」

まあ最初はそう思い通りにはいかないだろうけどな、と日高は苦笑した。ふっと、千早の表情に影が差す。
（・・・・・・）
「よし、それじゃあ早速明日から活動開始だ。と言ってもまだ挨拶回りの予定は決まってないし、レッスンから始めよう。トップアイドル目指して、頑張るぞ！」

春香と千早を帰し、一人黙々とスケジュール表に向かいあう日高に、社長は一言「ご苦労だったね」と告げて帰って行った。
出先の社長は夕日に照らされて少し赤みを帯びた色になっていた。・・・どうやったら人はあんな色まで日焼け出来るのだろうか。
「あの～、日高さん。ちょっといいですか？」
遠慮がちな声がオフィスに届く。振り向くと小鳥が手を拭きながら給湯室から出てくるところだった。
「あ、小鳥さんお疲れ様です。片付けの手伝いですか？」
「いえ、そうじゃなくてちょっと・・・千早ちゃんのことで、お話が」
そうして応接室のソファに「ちょっときゅ～けい♪」と口ずさんで腰を下ろした。
「あの子たちをユニットとしてデビューさせるって聞きましたよー？」
「ええ、そのつもりですが・・・何か、まずかったでしょうか？」
「そういう意味じゃないんですけど・・・」
と切り出した小鳥は、神妙な面持ちで話し始める。
「私の個人的な意見なんですけど、あの子たちって、まったく正反対だと思うんです。ユニットを組むとしたら多分もっと・・・春香ちゃんとなら明るくて元気な子、逆に千早ちゃんとならクールな子と組んだほうが、ユニットとして成功しやすいんじゃないでしょう

か？」
「・・・・・・」
日高は不気味にも黙りこくりながら、手はせかせかと鞄に資料を入れ始めている。
「え、あっ！こ、これはさっきも言いましたけどあくまで私の個人的な意見で、日高さんの考えとか私あまりわからないものですから・・・！」
「いえ、俺もそう思ってますよ。春香と千早は今、アイドルとしての相性はそんなに良くないですし」
「だから出しゃばった意見とか・・・はい？え、じゃあなんで・・・」
日高から出た予想外のセリフに小鳥は狐につままれたような顔をする。
「多分社長も同じことを思ってますよ、小鳥さん。だけど俺はあいつらをユニットとして出す以外の考えはありません。今のところ見えている最終目標もありますし」
「さ、『最終目標』？トップアイドルとは別の、ですか？」
「これ以上はだめですよ、いくら小鳥さんと言えど教えられません」
まとめた荷物を持ち上げて、「お疲れ様です、小鳥さん」と一礼してから事務所を出て行った。
「あっ、ちょ、ちょっと待ってください！最終目標って・・・行っちゃった。それにしてもなんでわざと相性が合わない二人を組ませて？『最終目標』っていうのもなにかわからないし・・・」
「日高さんのケチーっ！！」そんなセリフが商店街全域にこだました。

同時刻。
千早は戸惑っていた。

春香に連れられたこの公園で、何故か当の春香は一向に口を開こうとしない。
（話しにくいこと、なのかしら。私から話しかけたほうが？）
でも、「話したいことがある」という春香の目は真剣そのもので、自分から切り出してしまっていいものなのか、そんな懸念が千早の頭をぐるぐる回る。
「・・・わたし、おせっかいしちゃったかな？」
「え？」
ベンチに座ってから約五分。やっと口を開いた春香の口調には、先程のミーティングのときのような溌剌さは消え失せ、一回りしぼんだふうだった。
「おせっかい？春香が、私に？」
千早の問いに、春香は黙って頷く。
何のことだろう。千早にはその覚えがまったくなかった。
「わたし、あのときの歌聞いた瞬間からどうしても千早ちゃんと歌いたくなっちゃって・・・こんなに歌が上手な人の隣で歌えたらどんなに楽しいかなって」
「・・・・・・」
春風がすっと目の前を吹き抜ける。二人の髪がさらさらと横靡き、それにつられるように千早は立ち上がり、すたすたと広場へと歩いていく。
「でも、ごめんなさい！・・・それってわたしのことしか考えてなくって、千早ちゃんはアイドルには興味ないって言ってたのに無理やり引っ張ってきちゃったんだよね・・・」
春香は相変わらずうつむいているが、声色に表情がありありと浮かんでいる。それを察してか千早は初めて自分から言葉を紡いだ。
「・・・春香、それなら私も言うことがあるの」
「え・・・」
広場で踵を返す。千早の姿が夕日に照らされてきらきらと赤く輝いていた。口元にはかすかな微笑。

「ありがとう。もしあなたがあの時、ああ言ってくれなかったら、私はチャンスを逃すところだった」
「あ・・・え？」
顔を上げた春香からは険しさが消え、しかしいまだ笑顔は見えない。千早の言葉は春香の脳内で何度も再生される。
（ありがとう・・・？なんで千早ちゃんが、わたしに？）
「伝説的ボーカリスト『日高舞』。私の目標はその人なの。小さい頃に彼女の歌を聞いて、それから歌が好きになった。ラストライブはビデオにも撮ってあるし、『Ａｌｉｖｅ』だって何度も聴いているわ」
・・・いつか彼女みたいに歌を歌いたいって、ずっとそう思っていたの。
千早は過去を反芻するように視線を中空へと投げながら話す。
そんな彼女の姿は不思議な魅力に満ちていて、まるで違う時間軸に身を投げいれているような千早の表情に、束の間春香は、千早がそこにいるのにそこにいないような、奇妙な錯覚にとらわれた。
「『日高舞』の元プロデューサーである彼の元にいれば、きっと私が歌うべき歌のヒントを得られるかもしれないから・・・アイドルに対する興味はまだ沸かないのだけど、私には、歌しかないから」
こんなこと言うのは春香に失礼だけど、と千早は苦笑いを浮かべた。

その時、春香にふと疑問が浮かんだ。
千早は『日高舞』に近づくために彼の元でアイドルを始めた。
かく言う春香も舞に憧れてアイドルを目指そうとした一人だ。
けど、春香には『歌が好きだから歌う』というおぼろげながら自信を持てる理由がある。

ならば、千早は？

千早はたとえば『日高舞』に並んだとして、そしてそれからどうしたいのだろう・・・？

その2『e-S誕生』（後書き）

ちなみに作中に出てくる『E-s（エス）』だったか『es（エス）』だったかの映画（本物の名前を忘れた）は本当にあります。
うp主は見ずにパケの裏側を見ただけに留まりましたが、あれはどんな映画なんですかね？レンタルの棚には他にホラー物とかが一緒に並んでましたが。
春香さんが見たのはきっと携帯がプルプル鳴るアレじゃないでしょうか、そのあたりのご想像は読者様にお任せいたします。

余談ですが、動画の時もいつも一話あたりこのぐらいの長さのストーリーを入れているつもりです。どう見ても薄いのがより薄くなってるけど。
映像描写がどうしてもうまくならない・・・まあ、仕方ないね。

その3『春香にとって、千早にとって』（前書き）

三話目でございます。
ちょっと台詞の掛け合いばっかりで情景がうまく書けませんでしたorz
まあ今の自分には改良の腕がないのでこのままにしておきます。
さて今回は私の大好きなシリアス（笑）っぽい何かで書いてみました。
内容のほうについては、後書きにて少しばかり書かせていただきます。

その3『春香にとって、千早にとって』

きっかけは六歳か七歳かだった頃、深夜に起きてしまいやることもなくテレビをつけたことだった。

深夜帯のテレビなど見たこともなかった千早は、親も寝ている時間に起きているという背徳感、とでも言えばいいのだろうか。そんな感覚に後押しされながら画面の前で膝を抱える。

目の前で流れている番組は、アイドルが半分セクハラ紛いのゲームをしながら、それをクリアした一人のみが自分の曲を歌うことができるという典型的なアイドル番組だったのだが、途中から見始めた千早がそんなことを知るはずもなく。

勿論当時の千早を惹き付ける深夜番組などこれも含めて存在せず、五分ほど経って飽きが来たのか、眠気の戻ってきた彼女は薄眼を擦りながらテレビを消して自室へと帰ろうとする。

その時だった。

画面脇で不満そうにしていた少女（とはいえ千早よりも数段年上だが）から『話が違う』と怒号が飛んだのは。

どうやら自分の曲をワンフレーズしか歌わせてもらえなかったことが不服だったらしい。

丁度スピーカーの近くにいた千早の耳を射抜いたその声に、彼女はどうしたことか改めて画面の前に先程より近い位置を陣取って腰を下ろす。

当然このクレームが実を成すことはなかったのだが、それでも千早には彼女の名前が深く刻み込まれることになる。

それから彼女について調べ始め、番組を録画しては視聴し、ついには弟をも巻き込んで。

彼女に、彼女の声に、彼女の歌に魅入られていった。

それが如月千早とアイドル『日高舞』とのファーストコンタクト――。

日高家の午後二時は、いつもの二人に加えて客人二人を招き入れる珍しい形で始まった。
「・・・ど、どうですか・・・？」
テーブルの中央にはクッキーの広がった器。てっぺんに乗った一枚をつまんで、舞はそれを口の中に放る。
「ん～・・・うん、おいしいじゃない！やるわね春香ちゃん」
「あはっ、あ、ありがとうございます！・・・ほら、千早ちゃんも食べて食べて！プロデューサーさんも！」
「え、ええ・・・ありがとう」
もう一枚、と取る舞を見て安心したのか、緊張しているのか全く動かない千早に春香はクッキーを勧める。
・・・春香、楽しそうだなぁ・・・。
どうしてこんなことになっているのか。事の始まりは一時間程度前に遡る。

「プロデューサーさん！お昼休みですよ、お昼休み！」
「・・・うん、おはよう春香。今日も元気だな」
営業から戻ってきた日高は、視界いっぱいに入ってくる春香を軽くいなしてデスクへとついた。
「・・・って、え？それだけ？」
「他になにかあったっけ？」
「あるじゃないですか！今日千早ちゃんも来てるんですよ！？」
「いや、今日はレッスンも仕事もなかったはずだぞ？」

名指しされた千早は本に落としていた目を上げて、日高と目を合わせるなりヘッドフォンをとって一礼し、また自分の世界へと帰っていく。
ユニットの相方にまで捨て置かれ、そうじゃなくってー！と春香は独り相撲。
五月某日。デビューから約一月半が経ち、この一カ月で若葉から深緑へと成りゆくように・・・とは行かず、なかなか難航したアイドル活動となっている。
千早の歌はなかなか春香のそれと合わず、何より最初に選択したのは『太陽のジェラシー』という正統派アイドル楽曲なわけで、千早はあまり乗り気ではない。
その上で春香の歌は何というか・・・個性的なのだ。ものすごく。上手下手を超越した何かを時折感じるほどで、そういった要因も絡まってか、思い描いていたようにはファン数は増えないでいた。
「プロデューサーさん、今日は何曜日ですか？」
「うん、木曜日だろ？・・・あれ、平日じゃないか。二人ともなんでここに？」
「はぁ・・・やっと気づいてくれた・・・」
春香の遠距離通勤の問題もあり、仕事の少ないこのランク時期は活動をなるべく土日に絞っていたおかげで、日高は彼女を見た途端に今日が休日だと勘違いしていたらしい。
「えっへっへ～、実はここ一週間は、わたしも千早ちゃんもテスト期間なんですよー」
「テスト期間？」
「はい！だから学校が半日で終わっちゃって暇なので、事務所に来てみたんです！」
「来てみたんです！って距離じゃないだろ・・・。俺はこの後少ししたら営業に行かなくちゃいけないし、別にいてもやることないと思うけど。ただの打ち合わせだけだが付いてくるか？それともレッスンでもやる？」

日高の提案に軽く首を振った春香は、何を考えているのか不敵な笑みを浮かべながら、
「んー、それよりも。プロデューサーさん！お昼休みですよ！お昼y」
「春香、それじゃあ伝わらないわよ。せっかく持ってきたものもあるんでしょ？」
「あれ、千早。それはもういいのか？」
「これは趣味のクラシックを聴いていただけなので。プロデューサーも後で聴きますか？」
「んー、いや、聴くときは自分で借りて聴いてみるよ。それより春香、さっきからどうしたんだ？やけに昼休みを強調してるけど」
「えっとですねー」
日高の問いに春香は言葉ではなく、かばんの中から袋詰めのクッキーを取り出した。
二十枚程度入っていそうなそれはすべて綺麗なハート型を象っている。そういえば趣味に『お菓子作り』なんて書いてあったなぁ、などと思い返す日高。
「ん、誰か誕生日なのか？」
「違いますよー。遅くなっちゃったけど、舞さんにお礼がしたいんです」
「それで、せっかくだから一緒に来ないかと春香に誘われて」
「お礼？初日のことか？だったら俺が今日渡しておくよ。・・・あれ？」
クッキーに手を伸ばそうとするが、春香は不服そうにそれを下げる。
「違いますよ、日高さん」
「ああ、小鳥さん。聞いてたんですか？」
「そりゃあれだけ大声でしゃべってたら、聞きたくなくても聞こえますよ」
そうして持っていたお盆を給湯室に戻してから、「春香ちゃんた

ちは舞さんに会いに行きたいんですよ」と自信たっぷりに断言した。
小鳥のセリフに二人は頭を上下に動かす。
「二人ともお休みだから営業に連れていく予定組んでないんじゃないですか？」
「まあそうですけど・・・舞が家にいるかどうかもわからないしなぁ・・・」
「あ、それならわたしがさっき電話で聞きましたよ？」
「春香、なんで知ってるんだ・・・ってそうか、お前は舞に一回会ってるもんな」
その時に番号交換でもしたのか、まったくちゃっかりした奴だ。
「・・・はぁ、仕方ない。今日は二人とも仕事もないし、春香にいたっては四時間が無駄になっちゃうしな。けど、今回だけだぞ？」
「はぁーい！」
「はい、ありがとうございます」
春香は日高の声に顔を綻ばせた。心なしか千早の口元にも微かに笑みが見える。
・・・ま、たまにはこういうのもいいか。
ここ最近上手く行かなくてモチベーションが下がってたみたいだし、こうして笑ってくれるならそれに越したことはない。
オーディションが不振な今、営業に力を入れないと彼女らは芸能界からフェードアウトしていくことになる。そんなことはさせたくない。
だが結局は彼女らのモチベーション次第。それを管理するのもプロデューサーとしての義務。そのためには。
・・・少しでもいい仕事、持って来てやらないとな。
胸の内、堅く決意しなおす日高であった。

「・・・って、ゆっくりしてるけど嶺司さん。時間はいいの？」

「お、そろそろ出たほうがいいな」
回想を終えた日高は時計を見やると、長針は丁度「3」を過ぎたところ。
話があるということで一度事務所に戻ってくるようにと高木に言われている。営業まで時間はあるが、話にどれほどの時間をとるかわからない。余裕を持って行動するのが無難だろう。
「春香、千早。俺は行くけどゆっくりしていってくれ。あと、迎えに来たほうがいいか？終わってからも事務所に戻るから少し遅くなるけど」
「大丈夫ですプロデューサー。もう道は覚えましたし、二人でも帰れますから」
「え、千早ちゃんもう覚えたの？」
「春香、二回目なんじゃないの？」
「その～・・・最初のが全部曖昧だったから・・・それにこのあたり住宅街だから道が覚えづらくって・・・」
「・・・本当に大丈夫か？」
日高のこめかみがすぅーっと冷える。千早は呆れかえりながらも「私が一緒にいるから」と春香を励ます。
「私が送ってあげたらいいんじゃない？」
「愛が帰ってくる時間になるだろ？舞は家にいてくれ、な。あいつのことだから鍵忘れてるかもしれないし」
「う～ん・・・」
クッキーを運ぶ手を止めて、少しばかり考え込む。すぐに答えは出たものの、舞は不満げに、「・・・・・・はぁ、わかったわよぅ」と呟いた。
「それじゃあ舞、後は頼んだ。俺は事務所に行ってくる」
「はいはい、行ってらっしゃーい」
「プロデューサーさん、頑張ってくださーい！」
「よろしくお願いします、プロデューサー」

「しゃーちょぉー。日高さん遅いですねぇ」
社長室からひょっこりと出て来た高木に、小鳥は思い出したように問う。
「まあまあ小鳥くん、まだ彼が事務所を出てから一時間も経ってないんだぞ？昼食を兼ねていたはずだし、もう少し遅くても問題はないさ」
「けど社長、日高さんに話があるんじゃないですか？」
コーヒーを一口飲んだ小鳥だったが、眉間に皺を寄せながらそれを避けるようにして口から外す。
（に、苦・・・）
粉末を入れすぎたせいかはわからないが、とんでもなく濃くなっていたようだ。
すぐさまミルクを持ってこようと席を立つが、丁度切らしていたことを思い出し、仕方なく元の位置に戻った。
「うぅ・・・その話って春香ちゃんたちのことですよね。時間足ります？」
「うん？何の話だね」
「え？だから春香ちゃんたちの調子が上手く行ってないことですよねって」
「ああ、そういうことかね」
社長は「ふむ」と鼻を鳴らす。
「日高くんの方針については心配していないよ」
「えぇ！？な、なんでです？調子はどう見てもよくないですし、少し軌道修正とか・・・」
「プロデューサーは彼だからねぇ。彼女らを一番近くで一月半も見ていた日高くんが、それに気付かないはずがない。それでも変更しないのなら、彼にはなにか考えがあるのだろう」
それでも事務所に収入があまり入らないのは困りものだがね、と

高木は苦笑した。
「それより私が気になるのは如月くんのことなのだよ。小鳥くんは今まで彼女を見てきて、どう思うかね？」
「え？どうって・・・歌は上手ですし、容姿端麗ないい子だと思いますけど。あ、でも、十五歳っぽくないような気がします。大人びすぎているというか」
普段の風景を思い返してうーんと唸る。春香ちゃんのほうが子供っぽいのかしら、と一瞬考えたが、それは隅に追いやった。
「やはりそう思うかね。余計な詮索はするものじゃないんだが、どうしても気になってね。とはいっても私は何も知らないし、日高くんに少し訊こうかと思ったのだよ」
「ふーん・・・。プロフィールには母子家庭って書いてあったし、何かと難しい環境ですから、そう言った事情があるのかもしれませんしねー」
「只今戻りましたー！」
「おお、日高くん！丁度いいところに帰ってきたね。早速話を始めようじゃないか」
勢いよくドアが開く。帰ってきた日高に意気揚々とした高木の声がかかった。
会議室へと向かった二人を見送って、小鳥は一人机を探り、一冊のファイルを取り出す。
『如月千早　家族構成・母一人』
（大人びてる・・・というか、必要以上に自分を押し殺している感じがするのよね・・・気のせいかしら？）
答えを出すには情報が少なすぎる。だがもしかしてこれが日高の言っていた目的に関係しているかもしれない。
好奇心はあれども手が出せない。なんとももどかしい状況に耐えられず、小鳥は持っていたカップをひと思いに呷った。
「・・・苦いっ！！」

「あの、舞さん。訊きたいことがあるのですが・・・」
一方。のんびりとした午後のひと時を破いたのは、少しばかり震えながらも透き通った声だった。
千早の堅い一言に舞は「なぁに？」と、いかにも緊張感なさげな反応。
「舞さんがなんで『アイドル』をしていたのか知りたいんです。あれだけの歌が歌えるなら、ボーカリストでもよかったのではないかと思って」
「ち、千早ちゃん・・・直球だね～。わたしちょっとびっくりした」
その言葉に一瞬、春香の顔が強張った。
それもそのはずだ。憧れの大先輩に向かって突然のこの発言。下手をすれば失礼とかそういうレベルでは済まされない。
「ん～？私がアイドルをやってた理由？」
しかし意に反して舞は表情を変えず、それどころかクッキーを一枚放りこむと、
「これといった理由はないわよ？」
と一言に伏した。
「え・・・？な、何かに憧れてー、とかそんなのもないんですか？わたしも千早ちゃん・・・はちょっと違うけど、舞さんに憧れて・・・」
「あー、というよりは、私たちの前ってそういう『アイドル』があまりいなかったから、憧れる対象がなかったのよ」
九年前当時の情景を思い返しながら舞は「うん、やっぱりいなかったわね」と呟く。
春香は話の流れが落ち着いたことにホッとしたのか、ずっと手つかずだったアップルジュースに口をつけた。
「それじゃあ、舞さんは何故アイドルに？」

千早はなおさらわからないという風に怪訝な表情。声色にも困惑が見て取れる。
「ん～・・・よく覚えてないから何とも言えないわね」
けど、と舞は間を置いて。
「私らしい理由っていったらきっと『楽しそうだったから』なんじゃないかしら。多分それ以外だったらアイドルやってないだろうし。千早ちゃんは、楽しくない？」
「・・・楽しいとか、そういうのはまだ私には、よくわかりません・・・。けど、ずっと目標だった『日高舞』の元プロデューサーに出会えたのは、奇跡だと思っています。きっとこのままやっていけば舞さんのいう楽しさも、少しずつわかってくるのかもしれません」
「そ、そうだよ千早ちゃん！お仕事とか増えていけば、きっと楽しいから！」
「ん～・・・千早ちゃんは歌が歌いたいのよね？」
二人のやり取りにどこか違和感を覚えたのか、舞は少し顔をしかめながら割って入る。その問いに千早は迷うことなく首肯した。
「なんで歌いたいの？」
「そ、それは勿論あなたに追いつくためで」
「私を追ってて、千早ちゃんはそれで楽しい？」
「えっ？」
「ま、舞さん？」
二人は虚を突かれて言葉を詰まらせる。そんな二人はお構いなしで舞は言葉を続けた。
「じゃあもし千早ちゃんが私みたいに歌えるようになって、その先には何かあるかしら？」
「その先・・・？」
そう、その先。そう言いながら舞は空になった器を下げるために席を立つ。
「もし私みたいな歌い方をして、全部完璧に真似したって、そこにあるのはきっと『日高舞に「よく似た」歌』。私のすぐ後ろに千早

ちゃんがいるだけで、私はきっと越えられない」
「そ、そんなことはありません！きっとその先だってそこにたどり着けば・・・」
「見えるって、本当にそう思う？そこに千早ちゃんはいないのに」
「・・・・・・」
「あ、あの舞さん、もう・・・」
千早の叫びを背で受けて、返した言葉に千早は小さくなる。
『日高舞』を目指してずっと頑張ってきた千早だ、この言葉によるダメージは計り知れないものがある。春香は背中がじっとりと湿る感覚を覚えた。
「そこできっと止まっちゃうと思うの。それってすごく苦しいことよ。自分の可能性を自分で潰しちゃってるようなものだから」
「・・・なら私は、どうすればいいんですか？」
うつ向き気味な千早は、新たにジュースの入ったパックを持って戻ってくる舞に問う。
「私には歌を歌うことしかできないんです。あなたに憧れて歌い始めて、それでそれを否定されたら・・・！」
「誰かに憧れることが悪いなんて言ってないわよ、千早ちゃん？」
「・・・えっ？」
ふっと顔を上げる。千早の前には先程の難しい顔などなかったかのように、柔和な表情をした舞がいた。
「アイドルっていうのは憧れられるためにいるようなものだし。だけど千早ちゃん、あなたに『日高舞』の姿を求めている人なんていない。だから私は越えられない。それはわかる？」
「・・・・・・」
「だから、千早ちゃんは『千早ちゃん』になればいいのよ。自分らしく、自分のために。そのほうが絶対楽しいから。それに、私も『日高舞二世』をみたいなんてこれっぽっちもおもってないからね。それじゃ私がつまらないもの」
人差し指と親指を間を少しばかり開けて見せ、舞はにっこりと笑

った。
『楽しい』
舞はこの単語を何度も何度も繰り返す。
――――楽しい？アイドルをすることが？歌うことが・・・？
「ね、春香ちゃん。笑って歌えるアイドルと、そうじゃないアイドルだったら、春香ちゃんはどっちになりたいかな？」
「わ、わたしですか！？え、と・・・できれば笑ってるほうがいいかも。わたしが楽しく歌ってなかったらきっと、ファンの人に元気なんてあげられないし」
「ふふ、それでいいの。ねぇ、千早ちゃんはさっき嶺司さんに会えたのが『奇跡』って言ってたけど、奇跡なんてただのきっかけよ？アイドルが『楽しい』って思うようになるか、そうじゃないか。その奇跡をどう使うかはあなたたち次第なんだから」
（歌うことが楽しい・・・今私は、楽しくない・・・？）
「ん？千早ちゃん、何か言った？」
「あ、ううん。なんでもないわ、春香」
口に出ちゃったかしら、と千早は前に向きなおす。

ずっと歌うことが好きだった。
今だって、これからもずっとそうだと思ってた。
けど舞さんに追いついて、それでどうするの？
舞さんの見られなかったものはそこにはない。
私の見たかったものも、きっとそこにはない。
だとしたら私は、何のために歌を歌っているの？

いつからだろう。
いつから私は、歌を楽しいと思わなくなったんだろう――――。

「舞さん、今日はありがとうございましたぁ！」
空が赤く染まり始める。夕焼け小焼けが鳴り始めて、住宅街に四時を告げる。
玄関で履き具合を整えながら、春香は笑顔でそう言った。
「二人ともこれからたまに来てくれてもいいのよ？この時間っていつも暇だし、今日楽しかったし。あ、　春香ちゃんはクッキーまた作ってきてね」
「あはは、気に入ってもらえてよかったです」
「舞さん、私は・・・」
「ん？どうしたの千早ちゃん？」
「・・・いえ、なんでもありません。春香、そろそろ帰らないと」
「あ、そうだった！それじゃあ舞さん、さよなら！」
「ええ、アイドル頑張ってね～」
慌てた様子の春香はそそくさとドアを開けて出ていく。それに続こうとした千早だったが、
「あ、千早ちゃん。ちょっと待って」
「はい？」
それを舞の言葉が引き留める。ドアにかけていた手を戻し、ゆっくりと振り返った。
「千早ちゃんは歌が好きなのよね？歌うためだけにアイドルになったぐらいだし」
「はい、まあ」
「だったらきっとあなたにもあったはずだから。歌ってて楽しいと思っていたことが」
「っ！聞いて、いたんですか？」
「ごめんね、私は千早ちゃんとの話に集中してたから聞こえちゃったの。その頃を思い出せなんて言わない。だけど、認めてあげてほしいの」
「認める・・・何をですか？」
ドア外から春香の声がする。きっと千早を急かしているのだろう。

けどそれが聞こえたのは舞だけで、千早には聞こえていなかった。
「なんだろう・・・『本当の自分』、っていうとわかりづらいかもしれないけど・・・歌ってて楽しいって思っている自分を、ちゃんと認めてあげなさい。それが千早ちゃんにとって今、一番大切なことだと思うから」
「・・・はい」
短く一礼だけして、ドアを開く。
――――こりゃちょっと大変なんじゃない、嶺司さん？
閉じていくドアを見送りながら舞は一人、そんなことを思っていた。

「ふむ、それではキミの最終目的とは・・・」
「ええ、そういうことになります。勿論二人が望まないのであればその限りではないですけど・・・私の目標はそこです」
765プロの会議室。高木と日高の間には、得も言われぬ割り入りがたい空気が漂っており、
（うう・・・ど、どうしよう。お茶を届けに行くついでにちゃっかり話を聞いちゃうつもりだったんだけど・・・そんな空気じゃあないわよねぇ・・・）
ここに一人の野望が崩れ去ろうとしていた。
小鳥は薄く開けたドアの隙間から、ちらちらと中を窺う。部屋に差し込む赤い西日は、二人の影を一層黒く塗りつぶしていた。
「天海くんと如月くん。二人を組ませてからもうすぐ二カ月経つが、そんなところに組ませた目的があったのだね」
「はい。ですがやっぱりそう簡単には行かなくて・・・。千早の歌はまだ『あの時』から変わらないままです」
『あの時』って、日高さんと千早ちゃんが会った時のことかしら？
「気長にやりたまえ、と言いたいところだが・・・情けない話だが

こちらのほうに余裕があまりなくてだね」
スケジュールすかすかですからね～。
「春香のほうには少しずつ影響は出てきているんですが・・・千早がいつ春香の魅力に気付くか。それにさえ気付いてくれればきっと何かしらの変化があるはずなんです」
春香ちゃんに影響？最近妙にボイスレッスンに励んでることとか？
でも千早ちゃんに春香ちゃんが影響を与えるってどういうことかしら？
「うぅむ、少しのきっかけさえあればいいのだが・・・・・小鳥くん、いい加減覗いてないで出て来たまえ。こっちからは丸見えなのだから」
丸見え？なんのことかしら・・・。それに今私、呼ばれたような・・・ん？
「・・・いつからばれてました？」
「ドアが少し開いたときからだ」
「最初からじゃないですか！先に言ってくださいよ～。お茶、冷めちゃったじゃないですか」
「そんなになるまでそこにいたんですか・・・」
淹れなおしてきます、と踵を返す小鳥を高木が呼びとめる。
「まあまあ、丁度冷えたお茶が欲しいと思っていたところなんだ。持って来てくれたまえ。それに小鳥くんも一人だけ仲間外れでは不満だろう？」
「日高さんは教えてくれませんでしたけど？」
口を尖らせてむすっとふくれる小鳥に、日高はがばっと立ち上がる。
「いや、違いますよ！？仲間外れにしたかったわけじゃないんですが・・・小鳥さん、口軽そうですから・・・」
「失礼な！私は御近所様からめっぽう口が堅いって評判ですよ！」
「・・・小鳥くん。私も日高くんに少しばかり同意するものがあるよ。と、その話はいいから落ち着きたまえ」

手をわたわたさせながらの謝罪も無駄に墓穴を掘るばかり。見兼ねた高木は二人を仲裁し、対面のソファに腰を下ろさせた。
「まったく・・・まあ、話を続けようか。この件は二人にばれては意味がないからね。聞くからにはそこのところよろしく頼むよ、小鳥くん？」
「なんか釈然としないですけどわかりました。それで何なんですか、日高さんの目的って・・・」
会議室に影がひとつ増える。日高の言葉に神妙な顔をして聞き入る小鳥は、そのセリフに耳を疑った。

「「くっしゅん！！」」
二人揃った見事なくしゃみ。日高家から帰りの道中を行く二人は何を感じたのか辺りをきょろきょろと挙動不審に見回す。
「千早ちゃん、風邪ひいた？」
「春香こそ。それにしても二人揃ってなんて・・・そんな季節ではないと思うのだけど」
「ひょっとして誰かが噂してるのかも。ファンの人とか！」
「ふふ、だとしたら舞さんとかは大変そうね。それでどうするの？事務所には戻る？」
「んー、プロデューサーさん戻ってきてるかわからないし、メールだけ入れて帰ろっか」
言うが早いか春香は携帯を取り出して、指をピコピコと動かす。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・春香、訊いていいかしら」
「んー、なーに？」
歩みを止めた千早に気付いて、春香はくるりと振り返る。
「春香は『本当の自分』って、何だと思う？」

「んー、ふーん？・・・・舞さんに言われたんでしょ」
「よくわかったわ・・・・んぇ！？」
千早の両頬をつまんだ春香の手。
まーるかいてちょん、まーるかいてちょん。そう言いながらあちらこちらに伸ばしたり縮めたり。
春香は「わかるよう」と一言呟いてから、名残惜しそうに柔らかい頬から手を離す。
「だって千早ちゃん、日高さんの家出てからずぅっと難しい顔してたよ？」
「・・・そんなに？」
こくりと頷いた春香は、千早の真似とでもいうかのように目じりを釣り上げる。
「こんなになってたもん」
「もう、そこまではなってなかったでしょう？で、どうなの？」
「本当のわたしだっけ。今のわたしがそうなんじゃないかな？」
「え？」
「舞さんに憧れて歌が好きになってアイドルになって、それでもEランクから先に進めない今のわたし。未来はわからないから本当の自分はまだいないと思うし。千早ちゃんはどう思ってるの？」
まるで光と影だ。二人はくっつきながらも交わることのないそれのように、まるで対照的な心境だった。
「・・・わからないわ。けどそうやって自分を信じて前に進める春香は、すごいって思う」
「前に進むなら千早ちゃんだって同じだよ！ずっと歌の練習してきたから、そんなに上手になった歌があるんでしょ？」
天真爛漫な笑みを浮かべる春香を直視できずに、千早はふいと目を逸らした。
『もし千早ちゃんが私みたいに歌えるようになって、その先には何かあるかしら？』

きっとあるはずなのだ。千早自身が探していた何かがそこにはあったはずなのだ。いや、

――あると無理やり思い込んでた？

『そこに千早ちゃんはいないのに』

その通りだ。その先にあるのはきっと『舞が見られたかもしれないもの』で、千早のものではない。

その点、春香は違う。自分の中の歌に対する想いを迷わず歌にぶつけることで、あの明るい歌は成り立っている。だとしたら彼女は今歌うことで精いっぱいで、未来や過去など気にすることもできないのだろう。

彼女の言っていたことは的外れに見えて、意外と核心を突いているように思える。

『歌ってて楽しいって思っている自分を、ちゃんと認めてあげなさい』

――私の中にもいたのだろうか。あったのだろうか。いや、

歌は好きだ。今でもそう思っている。

けど、大切な何かをどこかに置き忘れているような気がするのは何故だろう。

頭上、初夏の夕焼けはじりじりと闇に支配されつつあった。

その3『春香にとって、千早にとって』（後書き）

舞さんはいつも通りです。
そんな舞の姿に二人が何を抱いて、これからどう変化していくのか。
これ（このシリーズ）を書く前にふとわかったのが、アイマスのキャラクターには二種類いるということでした。
目的があって歌を歌う者。それが例えばかわいらしくなるためであったり、自分を認めさせるためだったり、運命の人に見つけてもらうためだったり。
反対にそれを持っていない者。歌が楽しいから歌う、面白いから歌う。
後者に当てはまるのが自分では『春香・亜美真美』の二人（舞を含めて三人？）しかいないと思っていて、本当に強いのはそういう子なんだろうな、と感じています。
長文失礼いたしました。

その４『緩やかな休日の、緊迫した過ごし方』（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません・・・。
さて、春香たちもＤランクに上がってこれからが正念場ですね（ランクアップ期間的な意味で）。そんな彼女らですが、休日だってあります。遊びたい年頃なんです。
今回はそんな緩やかな話から始まった、よくわからないお話。

その４『緩やかな休日の、緊迫した過ごし方』

とある夏の日曜日、午前十時。
いつもならばプロデュース活動に勤しんでいるはずのこの時間だが、今日は珍しくオフとなっている。
朝食を済ませ、少しばかり街でも歩いてみようか、と日高は早速今日のスケジュールを立てる。
しかしそれは小刻みな振動音により阻害された。
「ん・・・？メール？」
そうしていつもと変わらないはずだったその日の朝は、奇妙な文面を迎え入れることから始まった。
『プロデューサーさん！日曜日ですよ、日曜日！』
「・・・・・・」
もはやすっかり眠気の醒めているはずの目をごしごし擦り、そうして何事もなかったかのようにパクン、と閉じた。
〜〜〜♪
「・・・・・・」
その直後、聴き慣れた着信音が耳に伝わる。
１コール。妙な予感を覚えながらも携帯を開く。
２コール。表示された名前はつい数十秒前に見たそれだ。
３コール。メールの文面を思い出す。
４コール。おそらく言われるであろう内容を想像しながら、
「もしもし」
日高は通話ボタンを押した。
『プロデューサーさん！日曜日ですよ、日ｙ』
「それはもう見たから・・・」
『じゃあ返事してくださいよー』
不満そうながらもどこか弾んだ声の春香。
ここ最近Ｄランクアイドルとして少しずつ忙しくなってきたので、

たまの休日がうれしいのだろう。
　千早もこの日は休みたいと言っていたので迷うことなくここにオフを当てたのだが・・・アイドルとして人前に出ている身とはいえ、やはり春香も年相応の女の子らしく、休日を楽しもうとしているらしい。
「と言われても見たのついさっきだしなぁ。・・・なんだか後ろが騒がしいんだけど、外にいるのか？」
　春香の声が時折周りの雑音で聞こえなくなる。この音は・・・車か？それに信号、人も多いな。
『はい！せっかくのお休みですから、中心街でいっぱいお買い物したいなって思って！』
「いいじゃないか。これから忙しくなりそうだし、今日一日は目一杯リフレッシュするんだぞ？・・・で、なんで電話したんだ？今友達とかと一緒だろ？」
『そう、それですよプロデューサーさん！！』
　突然の大声に日高はとっさに耳を離す。
『誰も一緒に来てくれなかったんですよーっ！みんな用事あるって言ってーっ！！』
　キィン！と一瞬金切り音が通り抜ける。反射的に電話から半歩身を引いた日高だったがダメージは甚大。少し目を閉じて、そしてまた電話口に戻った。
「わ、わかったから落ち着け。・・・じゃあ千早は？って、そういえば今日に休み入れたがってたの千早だったなぁ」
『念のため電話してみたんですけど、やっぱりどこかに出かけるみたいです』
「・・・それで、俺に電話したわけね」
――――街にいて一人っていうのは寂しいよなぁ・・・。
　休みの中心街は人が多い。そんな中で女子高生の春香が一人でいて何が楽しいわけでもないし、むしろ周囲の状況如何では逆にストレスが溜まりかねない。

それにプロデューサーとして、所属アイドルを一人で放っておくわけにもいかない。
「わかった。それじゃ俺も準備するから、事務所まで来てくれるか？ああ、あともしかしたら連れが一人いるかもしれないけど、いいか？」
『全然オッケーですよ！むしろ大歓迎です！じゃあ十時半ぐらいに行きますからー！』
「あ、おい春香！事務所行くまで俺三十分かか・・・一方的に切りやがった」
声の途絶えたことをもう一度確認してから終話、早速と日高は部屋を出て二階へ向かう。目的はただ一人。
「愛ー？いるかー？」
コン、と扉を叩いてから開けてみるが中はもぬけの殻。
――――おかしいな、土曜日だったら二度寝とかしてても不思議じゃないんだが。
起きたときのままにしてあるのか、無駄に汚くなっているベッドを少し手直ししてから下に降りる。
「愛なら遊びに行っちゃったわよー」
リビングに入った日高に、覆いかぶさるように間延びした口調で舞は告げた。
「そうなのか？」
そう、というそっけない返事とともにテレビのチャンネルが変わる。正面のソファに座っている舞はつまらなそうにリモコンを握りながら、振り返らずに日高に返す。
「学校の友達とね。えっと・・・やよいちゃんだったかしら。嬉しそうに出て行ったけど」
「タイミングが悪かったなぁ。ま、そういうことなら仕方ない」
「私は行っちゃだめなの？」
「・・・何しに行くかわかってるのか？」
「全然」

「・・・」
「冗談よ、冗談。私今日用事あるもの。春香ちゃんとのお買い物も楽しそうなんだけどね。ちゃんと春香ちゃんの面倒見てあげないとだめよ、プロデューサー？」
「わかってたんじゃないか・・・ってあれ、なんで知ってるんだ？」
「電話、春香ちゃんだったんでしょ？街にいるって言ってたみたいだし、買い物以外に何かすることある？」
「映画とか」
考えてなかった、と舞は思ったより素直に答える。
「はぁ・・・ま、プロデューサーとして荷物持ちにしっかり精を出させていただきますよ。あー、そういえば最近三人で出かけてないな。今度の休みにでも出かけるか？どこか行きたい所でもある？」
うーん、と少し唸ってからプツンと電源を消して、ソファにもたれかかるようにして振り返る。
「そういえば愛がアイドルのライブに行きたいって言ってたわよ？」
「・・・俺にどうしろと？」
「いや、こう・・・」
そう言いながら両手を右から左、右から左と絶え間なく動かす。
「？」
「そういうチケット、社長とかから貰ったりしないの？」
「ああ、そういうこと。前のプロダクションならあったかもしれないけど、７６５プロはどうかなぁ・・・あまり期待しないほうがいいかもな」
貧乏と社長自ら言うほどだ。確かに予算は少ないし給料もそれほど入っては来ない。どうして営業できているかすら、日高でも不思議がっている。他事務所のアイドル資料も大体映像資料だし。番組録画の。
「じゃあ春香ちゃんたちのライブ日程とか教えてよー」
「・・・チケットは自分で買ってくれよ？」
「けち」

「なんでだよ・・・」
まあそう答えるような気はしてたけどさ、と軽く身支度を整える。
「何よー、その溜息ー」
「なんでもないよ。それじゃあ俺は行くから」
買い物に付き合え、ということは持ち物は少なければ少ないほどいい。
春香の言葉を思い出しながら財布の中身だけ確認して、会話から逃げるように靴を履く。
「春香ちゃんによろしくねー」という間の抜けた声が聞こえて、それからゆっくりと玄関扉が閉じた。

街は熱気に包まれていた。
―――朝は涼しかったのになぁ・・・。
それは別に何かイベントなどがあって盛り上がっているとか、そんな心躍るものではなくて。
「春香、そろそろ・・・」
「プロデューサーさん、もう少しですから頑張ってくださいよー」
「・・・それ、三回目だが」
右手に三種類、左手に同じく三種類の袋をそれぞれぶら下げながら、ふらふらと危なっかしく歩いている日高に、春香は飴をやるどころか鞭を振り回した。
周囲からの憐れむような面白がるような視線が日高に注がれている。
しかしそんなことは意にも介さずゆっくりと前に、前に。目の前にいる少女を追って歩を進める。
―――外を少しも確認しなかった俺も悪いんだけどな・・・。
当然、その異変に日高が気付いたのは家を出てすぐのことだ。
事務所に行くまでに珍しくバスを利用したのも、原因はこれにあ

る。
「暑い・・・」
これまで影も形も現さなかった『夏』がたまたまタイミング悪く重なったのだ。
正午も近くなり太陽はますますの高みからさんさんと見下ろしてくる。迷惑なことこの上ない。この暑い中荷物持ちをしている自分の身にもなってほしいものだ。
「あと三つぐらい回りたいんですよぅ」
「・・・さすがに休憩だ、春香。お前は大丈夫かもしれないが俺はもう頭のてっぺんが暑くて暑くて」
周りの高層ビルはこのような場面で役に立ちそうなものだが、生憎の天気、時間帯が合わさって影の少しも出来たものではない。
おまけに普段は心地よく吹き抜けるビル風も、今日に限っては特大のドライヤーと化している。
街に出て三十分。頭頂をじりじり焼く熱線と四方八方から次々襲い来る熱風に、日高は早くも白旗を上げた。
目の前の春香はと言うと、帽子などかぶって涼しげな顔をし、「仕方ないですね」などとこぼしている。
「どこかでお茶します？この辺にいいお店あったかな～」
「いやすまん春香、探す気力も俺にはもうない・・・昼時だし、ファミレスでご飯でも食べないか？奢るからさ」
「え？えっとじゃあ、サイ○リアのミラクルダイナマイトチョコサンデーもいいですか！？」
「ミラ・・・？よくはわからないけど、そこでいいならそうしよう」
手放しで喜ぶ春香に応じてやりたい気持ちは山々だが、暑さにやられて思うように動けない。
―――愛もこれぐらいになったらこういうふうになるのだろうか・・・。
まだ気が早いような気もするが、娘を思い日高は静かに溜息をもらした。

サイ〇リアは盛況のようだった。
以前来たときの二倍程度の客入りで、避暑に来た客とは反対に店員はめまぐるしく動き回っており、入るのが申し訳なくなるほどだ。
さて、そんな空気もお構いなしにテーブルの中央にそびえる巨塔――――『ミラクルダイナマイトチョコサンデー』の処理にかかった春香だったが、どうやら予想以上の物量だったようで、今はスプーンを置いてメロンソーダをおとなしく飲んでいる。
思いもしなかった強敵に遭遇して、命からがら前の村に逃げ帰ったというところだろうか。今は体力を回復しつつ、ゆっくりと敵の姿を観察している。
「すごい量ですよね、これ」
「まあ確かにそうだが・・・珍しいな、春香が甘いものに対して前情報を持ってないっていうのは」
「新発売ですから」
友人の中にもこれに挑戦した人はいなかったんですよ、と春香は再びスプーンを手にする。
「この前営業でこのあたり通った時に見つけたんですよ。それからずっと気になっちゃって、千早ちゃんも連れてきたかったんですけど」
「・・・千早はどんな顔をするだろうなぁ・・・」
「ですよねー。千早ちゃんって何が好きなんでしょうか」
「そんなこと訊かれてもなぁ・・・」
日高にも春香にも、千早は自分のことをあまり話そうとはしない。人付き合いが苦手なのか、踏み込まれるのを嫌う性質なのかはわからないが。
「そういえば千早も今日は出かけてるんだったな」
「んー、電話ではそんな感じでした。千早ちゃんも学校の友達とお出かけしてるんでしょうか？」

「千早が、ねぇ・・・」
普段見ている彼女の姿から、少し想像を巡らせる。
たとえば春香のように買い物を楽しんでいたり・・・。
または喫茶店でおしゃべりにふけっていたり・・・。
万が一にはゲームセンターとか・・・。
――――どれも合わないなぁ・・・。
「う～む・・・あまり想像できないな。千早が楽しそうに遊んでるところ」
「失礼ですよプロデューサーさん。千早ちゃんだって普通の女子高生で・・・っ！プロデューサーさん、伏せて！」
「は？突然何うっ！？」
ガンッ！と突然額から鈍い音が広がる。向かいの春香に頭を掴まれ、テーブルに叩きつけられたのだ。
「～～～～！、！？」
「静かにしててください！」
「今ので逆に目立っただろがっ」
「千早ちゃんです」
春香も少し頭を傾けつつ、窓側を指さす。その向こうには街中を歩く千早の姿があった。
「・・・噂をすればなんとやら、だな」
「夏の虫ですね？」
「『影』、な」
「・・・」
どうやら素で間違えたらしく顔を真っ赤にする春香は、照れ隠しなのか残ったサンデーを猛スピードでかきこみ、勢いよく席を立ちあがる。
「プロデューサーさん、追いますよ！」
「お、おい！追うって・・・お前買い物は！」
「時間があったらあとで買います！」
「いやそうじゃなくて・・・ちょっと待てって！」

伝票はともかく荷物の一つも持たずに出て行った春香を急いで追いかける。
・・・レジのお兄さんに気の毒そうな視線を向けられたのは気のせいだろう。

バスに乗って十数分、そこからひたすら歩いて郊外に出る。細い道を迷うことなく進んでいく千早。
「ふぅ・・・はぁ・・・千早ちゃん、どこまで行くのかな・・・。プロデューサーさん、この辺りって何があるんです？」
「いや、さすがにここまでは来たことないからわからないな」
その数十メートル後ろで息を切らす春香。日高は行く先を見ながら首を傾げる。
「中心街から随分離れたけど、誰かと会う気配もないな・・・」
「ずっと住宅街です・・・これじゃお買い物出来るところもないですよ」
「ほら、千早曲ったぞ、追いかけよう」
角に姿が隠れたことを確認して追いかけ、春香より先に千早を捉える。
春香は日陰を探して一休み、といったふうで、丁度目の前にあった自販機に手を伸ばす。
「こら、音でばれるだろう」
「・・・プロデューサーさん、ノリノリじゃないですか」
「・・・そう言われると否定はできない」
真剣そうな横顔に春香から思わずふと漏れたそのセリフは、少し熱の入っていた日高を正気に戻すに足るものだった。
春香の顔色はそれほど悪くはないが、汗がだらだらと頬を伝っている。長距離の歩行移動で少し疲れも見えた。
日高は財布の中を探って、五百円玉を一枚取り出し、

「こんなに暑いと熱中症とか脱水症状とか怖いしな。ほい、これで買ってきな」
と春香に手渡す。
「え、いいんですか？」
「アイドルの体調管理はプロデューサーの仕事だからな。ただし、おつりはちゃんと返せよ？」
「ありがとうございまーす！」
嬉々とした表情で自販機の前へと向かう春香を見送ってから、千早に視線を戻した。
幸い今のやり取りの間に見失ってしまうことはなく、千早は辺りを気にしているのか、それとも何かを探しているのか群青の髪を揺らしながら、速度を落として歩いていた。
まさかここまで来て迷った、なんてこともないだろう。次の曲がり角に差し掛かった頃、春香の声が耳元に近づく。
「戻りましたー、千早ちゃんはどうですか？」
「ん、まだそこにいるけど・・・もしかしたら気付かれたかもしれない。なんかきょろきょろしてるし」
「え、、本当ですか？」
「いや、まだわからん。後ろ見ないからまだ気付かれてないんじゃないかな。何かを探してるような感じだ」
「このあたりで何かを探すって・・・あ、プロデューサーさんこれ」
「ん？」
春香がにっこりとして手渡したのは、２３０円の小銭と
「コーヒー？」
「プロデューサーさんも喉乾いてるかなと思って一緒に買って来たんです。まあわたしのお金じゃないですけど・・・」
あはは、と苦笑いの春香に日高は軽く微笑み返した。
「いや、助かるよ。丁度そう思ってたところだ」
「ほんとですか？ブラックですけど、微糖のほうがよかったとかないですか？」

「微糖はすこし苦手なんだ。変に甘いよりこの方がすっきりするしな」
そう言ってプルタブを空けて一口。
「ん、でもそんな悩んだならお茶とかでよかったんじゃないのか？」
「張り込みにお茶は似合いませんよう」
「なるほど・・・」
よくわからない理屈をさらっと述べた春香といえば、しっかりスポーツドリンクなど手にしている。それも絵面としてどうか、などと突っ込みを入れようとしたが、
「あ、プロデューサーさん！千早ちゃんがいません！」
「え！？」
春香の叫びによってそれは未遂に終わった。いつの間にか千早がどこにも見当たらなくなっているのだ。急いで先程の位置まで走るが、影も形もない。
「しまったなぁ・・・もっとしっかり見ていれば・・・」
「仕方ないですよ、ちょっとこのあたり探してみましょう」
春香の言葉に頷いて最寄りの角を曲ってみる。住宅街を当てもなくさまようのは危険なのだが、今回は幸い曲って少ししたところに大きい家があり、そこから先は行き止まりになっていた。
引き返してその次の角に入っても、時間が経ちすぎたせいか千早の姿はなかった。
「あ、プロデューサーさん」
「見つけたか？」
「いえ、そうじゃなくて・・・あそこにお花屋さんがありますから、ちょっと訊いてみましょうよ。もしかしたら前を通ってるのを見たかもしれないし」
春香が指さしたのは、いかにも老舗という感じのするそれだ。佇まいも今時のものよりもずっとおとなしく、住宅街にすっかり溶け込んでいる。
「そうだな、そこで情報を得られなかったら、仕方ないから帰ろう」

「はーい。あ、出て来た。プロデューサーさんはここで待ってて下さい。すいませーん！」
店外に出している花の手入れに来たらしい男性に春香は声をかけながら近寄った。

「いらっしゃいませー」
「あ、ごめんなさい。お花を買いに来たわけじゃないんですけど・・・この辺でロングヘアーの女の子、見ませんでした？」
マニュアル通り丁寧な接客に良心が痛むのか、一言謝ってから本題へ入る。
「あー、その子だったらウチで花買ってから向こう側に行ったけど・・・キミ、如月さんの友達？」
「え？千早ちゃんを知ってるんですか？」
「去年も一昨年もこの日に来てたからね。そのもう少し前はお母さんと一緒で、その時話したから覚えてるんだ。そこを曲がって少ししたら広い所に出るから、そのあたりにいると思うよ」
青年はあっち、と指で指し示す。
「あの、それっていつ頃から？」
「え、っと・・・」
少し空を仰いでからまたすぐ戻り「うん」と誰に言うでもなく肯定し、告げた。
「確か、六年前ぐらいからだったかな」

「ぷ、プロデューサーさ～ん・・・本当にこっちで合ってるんですか～・・・？」
「いや、春香が訊いたんだろう・・・」
先程までとは反対に若干涙声。
「だ、だってここ・・・お墓ですよぉ・・・？」

周りを見回しながら歩幅を狭め、日高の後ろに隠れるようにして進む春香に、日高はため息を漏らした。
「大丈夫だよ春香。今は昼間なんだし」
「でもやっぱり雰囲気違いますし、それにこの前見たホラー映画がまだ頭に残ってるんです～」
「また見たのか・・・友達からの誘いでも怖かったらそういうのは見るなって前にも――」
「いえ、誘ったのはわたしなんですけど・・・」
「・・・・・春香、お前やっぱり好きなんじゃないのか？」
「・・・えへへ」
だめだ。これは怖いもの見たさとかそういうのじゃない。お化け屋敷とかに進んで入って、絶叫を楽しむタイプだ。
「それのシチュエーションが丁度こんな感じだったんですよぅ。大学生の二人が肝試しの下見で昼間の墓場に・・・」
「いや話さなくても」
「自分だけ怖いの嫌じゃないですか。で、その二人が周囲を終わって・・・」
巻き添えか、と日高は苦笑する。映画を一緒に見に行ったという友人も、そういう理由で誘ったのだろうか・・・。
「帰ろうとしたら、誰もいなかったはずのお墓から変な歌声が聞こえ」
・・・～～～♪
「・・・・・・」
「・・・」
空に響き渡る、透き通った高い声。春香の顔がみるみる青ざめていく。
「ぷ、ぷろ」
「そういう話は霊を呼ぶって言うよな」
「や、やめて下さいよ・・・」
「迷信だから気にしない。それより行ってみるか」

「あ、ちょっと待って下さいって！」
入口を探して入っていく日高を止めようと追いかけるも、脳裏に再生されるものの怖さからか、次第に速度が落ちていく。
「プロデューサーさん、待って下さいってば！その映画だとこの先に」
――――俺の予想だとこの先に・・・。
日高は遠くなった春香の忠告を無視して進んでいく。先の歌声に聴き覚えがあるのだ。声がした方向に、曖昧に歩いていった。

少し歩くと、見通しのいい広場に出た。その歌声はもう聞こえない。日高は立ち止りきょろきょろとあたりを見回す。
「ちゃんと聞いてくださいプロデューサーさん、その先にロングヘアーの・・・ひっ！？」
「え！？どうした？」
と、遅れて追いついた春香は突然、素っ頓狂な声を上げて座りこむ。思いもよらぬ事態に慌ててフォローにかかる日高。
どうしたか、という問いに春香は一向に答えを言わず、その代わりカタカタと震えた指先で、自分の視線が釘付けになっている方を指さした。
見ると逆光でシルエットまでしか見えないものの、『ロングヘアー』の『女性らしき影』がある。
「・・・えっと、春香。その続き聞いてもいいか」
「えぇ、な、なんでですか？」
シルエットの顔と思しき部分が傾いた。こちらを見ている。
「なんでもいいから。それで、どうなるんだ？その二人は逃げたのか？」
「・・・その時の記憶だけなくなって、表向きは普段通りの生活に戻ります。ただし・・・」
「ただし・・・？」
シルエットが近づいてきた。夏日の強い逆光の所為でまだよく見

えてこない。
そんな状態で日高は固唾を飲んで春香の言葉を待つ。
「二人に見えてる景色は幻覚で、実は死後の世界に・・・」
「逃げられないのかよ！？」
ああ、瓢箪から駒とはこのことをいうのか。霊を呼ぶなんて俺が言わなければこんなことには・・・。
――――終わった・・・。
「何をしているんです」
「「・・・え？」」
いろいろと覚悟していた二人にかかったのは、聞き慣れた女の子の声だった。
群青のロングヘアーに、それが映える長身。どこか冷めた眼差しで二人を見下ろす彼女は、
「千早ちゃん！」
探していた当人そのものだったのだ。

「「ごめんなさい」」
「・・・・・・」
深々と頭を下げる両者に突き刺さる視線。千早は無言のままに二人を見つめる。
（プロデューサーさん、ものすごく痛い視線を感じるんですけど）
痺れを切らしたのか、頭を下げたままの春香は隣の日高に小声で話しかける。
（まあ、それが当然の反応だろうな）
「プロデューサー、何を話してるんです？」
「いえ、なんでもございません」
「ち、千早ちゃん・・・なんか怖いよ・・・？」
墓場の真ん中で下ばかり見るのも疲れたのか、春香は少しだけ視

線を上に傾ける。
「ストーカーまがいのことをされて、怖くならないわけないでしょう」
辛辣・・・いや当然の発言と相変わらずの差すような目つきに圧倒された春香は再び小さく縮こまった。
その様子を見て少しばかり溜飲が下がったのか、千早は「はぁ・・・」と小さくため息。
「・・・もういいです。それに随分前から知ってましたし」
「え、っと、いつから？」
「・・・あのね春香。同じバスに乗っててわからないわけがないでしょう。プロデューサーも、尾行するつもりならタクシーとかのほうがいいことぐらいわかるでしょう？」
「いや、金がなくてだな」
「あと、カーブミラーぐらいチェックしてください。思い切り映ってましたよ」
・・・なるほど、映画やドラマの見よう見まねではだめ、ということとか。
さらに日高のそれに対する知識はなかなかに古い。電子機器の発達した現代からしてみればもうその方式は埃を被っている上、必要最低限の注意すら払っていないのではばれて当然だ。
「・・・でもそんなに前からわかってたなら、なんで追い返さなかったんだ？」
「・・・そろそろ話してもいい頃だと思って。二人とも、こっちへ」
「わたしも？」
「そう、春香も。パートナーなんだから、私が歌う理由を知ってもらったほうがいいわ」
「歌う・・・理由？」
見ればわかるわ、と返して千早は先に立ち、二人をひとつの墓の前につれて来た。
『如月家ノ墓』と書かれたその墓を見て、千早は一言、

「弟です」と告げた。
「え？おとうと、って・・・千早ちゃん、一人っ子じゃ」
「七年前に、交通事故でね。それからずっとこの日にお墓参りに来ているの」
「え・・・あの・・・ごめんなさい。そんなことも知らないで勝手についてきたりして・・・」
「そのことならさっきも言ったでしょ？私が話したいから話してるのよ」
「うん・・・」
「じゃあ、千早が歌っているのは弟のためなのか」
「・・・昔よく褒めてくれたんです、私の歌を。憧れて歌い始めた舞さんの『ＡＬＩＶＥ』を、一番よく聴いていてくれました」
　戻らない時代を懐かしみながら、千早は一言一言丁寧に繋ぎ合わせていった。
「弟のため・・・になっているとは思わないですけれど、両親が離婚して、母とも仲違いしている私にとって、この子との繋がりはもうこれしかないんです。この子がよく褒めてくれた、この歌しか・・・」
「・・・・・・」
『ならいいんだけど・・・。さて、そろそろ帰らないで大丈夫？夜遅くなると危ないし、親も心配するだろ？』
『・・・いえ、もう少し練習していきます。いつも遅い時間までやっているので、母もわかっていると思いますし』
　初めて会った公園での彼女の表情が鮮明に思い出される。あの時の曇ったそれは、そういうことだったのか。
「だから私は、この歌で歌手としてトップに立ちたい。そして、きっとそれが私の――――」
「・・・千早ちゃん？」
「・・・あ、ううん、なんでもないわ」
――――それが私の？

弟のため、以外にも何かあるのだろうか。なんでもないセリフに日高は疑惑を抱く。
そして予感する。千早の歌の中心はおそらく、最後に出かけた『それ』なのだろう、と。
「ですからプロデューサー、お願いです。私をトップボーカリストに導いてください。そのための努力なら、惜しむつもりはありませんから。これからもよろしくお願いします」
「・・・ああ、俺も千早の歌が本物になるように努力する。出来るだけ歌の仕事をとってくるよ。こっちこそよろしくな」
「あ、あの千早ちゃん！わたし、もっ頑張るから！一緒にトップアイドル・・・じゃなかった、トップボーカリストになろう、ね！？」
今の話を聞いて涙ぐんでいる春香の微妙な嗚咽交じりの声に、千早は少し苦笑し、
「・・・ふふっ、ええ。よろしくね、春香」
やがてその表情は柔らかい笑みに変わった。

そうか、やっとわかった。千早の歌に抱く小さな違和感が。
しかし・・・これは千早自身の問題。俺ができるのは、その手助けまで。
だができることはすべてしてやりたい。それがきっと、俺と彼女らが出会った理由なんだと思う。

その４『緩やかな休日の、緊迫した過ごし方』（後書き）

前書きにも書きましたが、遅くなって本当に申し訳ないです・・・。バイトスケジュールがきつくて、全然書く暇がないｏｒｚこの連休中にできるところまで書き進めておかないとなぁ・・・。とここでちょっとした質問なんですが（面倒な場合は答えなくて大丈夫です）、この二次小説で、原作とのキャラブレが激しい、と思うキャラいますかね？原作準拠を掲げているので、もしそういうのがありましたら、言っていただければ可能な範囲で直します。

次回はシリアス（笑）です。お楽しみに？

追記：最後直しました。完全に気の逸りです。日高がそんなこと知ってるわけねーじゃんと慌てて直しましたｗｗ

その５『活動時間外の閑話急題』（前書き）

今回は短いです。が、タイトル通りここから物語が変化する『急題』となっております（なってるかな・・・？）。
千早の思い、春香の不安、そして日高の行動がどういった物語になっていくのか、そんな風に読んでいただければなと思います。

その５『活動時間外の閑話急題』

それは、今までの感覚とは少し違うものだった。
しかし『それ』は間違いなく、これまでにも薄々感じていたもので、それでいて彼女は無視し続けていた。
ついに目を逸らすことができなくなるほどに大きくなった『それ』は、初めて彼女を歌というものに対して悩まさせる。
歌に問題があるわけではない。踊ることにひどく抵抗があるわけでもない。歌の仕事はあまり来ないものの仕事にそれほど不満はない。
それでも何故か、彼女の隣で歌うにつれてどんどんと膨らんでいくのだ。
そう、『それ』はとある些細な『既視感』。

「・・・んー」
「お疲れですね日高さん。どうぞ」
「あ、小鳥さん。そういうわけじゃないんですけどね」
ことん、と音を立ててお茶が置かれる。落としていた視線を上げるとそこには見慣れた事務服に身を包んだ小鳥が立っていた。
「もうすぐ帰ってくるはずなんですけど・・・迎えに行けない分心配で」
「あ、そういうことでしたか。日高さんも最近忙しそうですから、仕方ないですよ」
まだ残暑こそ残るものの、景色は次第に秋模様へと移り変わっている。
移り変わったのは景色だけではなく、新進だった765プロにもだんだんと仕事が舞い込むようになり、日高含め五名は今までにな

いほど忙しなく動いている。事務所内の情景も様変わりというわけだ。
秋の日はつるべ落としというように、窓の外はすでにうす暗くなっていた。時計と目の前の書類を交互に見つつ、そろそろ帰ってくるはずの二人を待つ。
「ただいま戻りました～・・・」
「お、春香お帰り。・・・どうした、浮かない顔して？」
「うーん・・・そう見えます？」
見える、と返した日高は席を立ち、冷蔵庫から昼に二人分買っておいたシュークリームを取り出し、ソファに座って萎れかけている春香に手渡す。
一瞬顔が綻んだものの、またすぐ何かを思い出したかのように、もそもそとそれをほおばった。
ここ最近にこんな表情を見た覚えはない。とすれば・・・、
「レッスン上手くいかなかったか？」
「そうじゃないんですけど・・・」
「けど？」
――やはり原因は今日にあるらしいな。
（日高さん、日高さん）
給湯室のほうから聞こえた声に振り向くと、小鳥が小さく「こっちこっち」と手招きしている姿が目に入る。
「・・・なんです？」
「これ」
招かれるままに給湯室へと入った日高に手渡されたのは、見覚えのあるコップ。
「これは・・・」
「春香ちゃんのコップですよ。春香ちゃん、何か悩んでるみたいだし・・・プロデューサーとしてちゃんと聞いてあげて下さいね？私は少し社長のところに行ってますから」
どうやら時間を作ってくれるということらしい。お盆を胸に抱え

たままの小鳥はにっこりと微笑んで出て行った。
感謝の念を抱きつつ、日高はそのコップにジュースを注ぎいれる。
「ほい、オレンジでいいかな？」
「あ、ありがとうございます・・・」
相変わらず暗い表情。普段の春香からは想像もつかないほどのものだ。
とにかく、原因を探るしかない。一念発起の日高だったが、
「・・・千早ちゃんの様子が、なんか変なんですよ」
「お！？おぉ、そ、そうなのか？」
春香の唐突な切り出しに日高の言葉はすぐ詰まった。
まあ、話してくれるのならいいだろう、と気を取り直した日高は「どう変なのか、言葉で言えるか？」と問いかける。
「どう変って・・・何というか、焦ってる・・・のかな？わたしにはそう見えたんですけど。ちょっと根を詰めすぎというか、最近はどれだけレッスンしてもどこか不満そうで」
「そういえば千早がまだ帰ってきてなかったな。もしかして、まだレッスン場に？」
春香はそれを首肯しつつ、ジュースを一口。
「レッスン時間延長するって・・・。先生も止めてたんですけど、それも押し切って」
「そっか・・・」
「『そっか』って・・・止めないんですか？あのペースでレッスンしてたら、喉壊しちゃいますよ」
「春香は止めなかったのか？」
「そりゃ、止めましたけど・・・」
溜息を吐いて俯く春香の目からは、溌剌とした輝きが完全に失せている。
「千早ちゃんが歌を歌う理由、知ってますし・・・あまり強く止められなくって」
「まあ、俺が止めてもきっとどこかで自主レッスンかなにかやり始

めそうだからなぁ、千早は」
　やるとしたらきっとあの公園なんだろうな、と日高は出会った当初の千早の姿を思い浮かべる。うん、やはりしっくりくる。
「よし春香、千早のことは俺に任せてくれ。多分すぐには無理だと思うけど、ちゃんと説得してやるからさ」
「う～ん・・・」
「え゛、俺そんなに信用ないか？」
「いや、そうじゃないですよ！？・・・今日はちょっと疲れちゃったんで、もう帰りますねー。次っていつでしたっけ？」
「えっと・・・お、来週だな。その時に新しくまたスケジュール表渡すから、ゆっくり休むんだぞ？千早にもちゃんと言っておくから」
　お願いしますね～、とくたびれた声を返して春香は事務所の扉を閉めた。
　テーブルの上に置かれたままのコップに手を伸ばし、給湯室へと入っていく。その日高の表情には、すこし笑みらしきものが見えた。
「終わりましたか？」
「うぉ、小鳥さん！？いつここに！？」
　予想していなかった人物の登場に、日高は思わず一瞬身を引いた。
「私はいつでもここにいますよ」
　どこかしてやったりという表情な小鳥は「えっへん」と胸を張る。
　神出鬼没な人だ。落ち着けるために深呼吸をする日高の手から、それは自分の仕事だとコップを取り上げてがしゃがしゃと洗い始めた。
　軽く会釈をして部屋を出る。そうしてから今度は踵を返し、社長室へと向かって歩いて行った。

　『日高　舞』の引退した翌年になっても、彼女に対する熱は冷めることがなかった。

電器屋の前や、高層ビルの広告ビジョン。どこを通っても街のどこかしらで彼女の声が聞きとれる。
「ほら姉ちゃん！こっちこっち！」
「ちょっと千歳、おかーさんたちと一緒にいなくちゃだめよ！」
「いーから早くっ！すっごいおっきな画面でね、日高舞が出てるんだよ！」
大きな人だかりの中にそれを見つけた彼――――如月千歳は、両親とともに信号が青に変わるのを待っていた千早を連れて液晶の前に立った。千早はその行動に困惑しながらも、幸せそうな笑顔を見せる。
他のテレビより一回りも二回りも大きいその画面に彼は釘付けである。勿論五歳にして家電に興味を持っているわけではなく、その大画面にでかでかと映った『日高　舞』の姿にだ。これは確かラストライブの映像だったかしら、などと思いつつ同じくして彼女も舞の歌い踊る姿にしばらく見とれていた。
「千早ー、千歳ー！早く来なさーい！」
「あっ、はーい！」
「ちょっ、待ってよ姉ちゃん！」
遠巻きに母の声。いち早く気付いた千早は横断歩道を駆け足、一瞬遅れて千歳は彼女を追って走り出す。
突如として、千早の耳から音が消えた。そのときだった、千早の背後に強烈な風が流れたのは。
目の前には何かに愕然としている両親と、がやがやと蠢く人だかり。何があったのか、彼女には全くわかっていなかった。
ただ彼らの視線が向くほうへ、千早はゆっくりと――――
ガバッ！！
「――――――っ！？はっ・・・はぁっ・・・・」
――――また、この夢・・・。
荒れた息を抑えて、濡れた目尻を軽く拭った。

――――しばらくこの夢は見ていなかったのに。
昔はちょっとしたきっかけでよく見たものだが、最近になってまた少しずつ見るようになってきた。
自分の体は一体どうしたと言うのか。墓参りの日に見ることはあっても、こんななんでもない季節に見ることなんて今まで全くなかった。
朝特有の微妙な涼しさも相俟って、うなされていたからだろう、寝巻をべったりと濡らした汗が冷えて非常に気持ち悪かった。
――――・・・シャワーを浴びて、一回すっきりしよう。
眠気の醒めた千早の頭は、まずこの不快なものを取り除きたいらしい。日課の早朝ランニングへと向かいたかったがこのままウェアに着替える気にもならず、「同感」と千早はそれに従い階段へ向かう。その途中にある扉を開き、
「ねぇ、どうして今なの・・・？」と千早。
暗がりに空しく響いたその声に応ずる声もなし、千早はゆっくりと出て行った。

秋の朝は、部屋で感じたよりもさらに冷え込んでいて。
時折吹き抜ける冷たい風が頬を撫でていく。その度に舞い上がる、かつての精彩を失った落ち葉が、千早に秋が深まったことを伝えていた。
今日はどうしようか、近所のランニングコースを淡々と走るより、公園のほうに行ったほうが気分は晴れるだろうか、そんなことを考えながら千早は軽快な足音を立てて、見えた角を次々に曲がっていく。
微かに湿った髪が右に左にと揺れ、首筋に当たるひんやりとした感触が、起ききっていなかった部分を一気に覚醒させる。それでも一番靄掛かった部分だけは晴れることはなく。

――何か不安なことでもあったかしら・・・。
きっとこれは心境がどこか変化したからなのだろう。しかし千早自身にはまったく心当たりがなかった。仕方なしに最近あったことをいろいろ振り返ることにする。
最近セルフレッスンが増えたこと――これはまあ、仕事が増えて忙しくなったからで別に悲観することじゃないわね。
春香と妙にボイスレッスンの日が重なること――春香を拒む理由はないし、むしろ歌唱力を強化してくれるのはありがたいし・・・。
レッスン中春香との距離が異様に近いこと――これ、かしら。なんかじろじろ見られてるのよね・・・。
だけどそれとあの日の夢との繋がりは全くない。それに二番目は、自分の中でボイスレッスンの比重が一気に上がったため被るのも仕方がないと言える。

『歌手になる』

それを目標にして今日までレッスンを続けてきた。今の私の歌を聴いて、千歳はあの時のように聴いてくれ、喜んでくれるだろうか。
「・・・あ、雨？」
ウェアに落ちた滴は次第に数を増し、「ぽつり、ぽつり」とアスファルトを叩いていく。
今日のランニングはこれで終わりにしよう。今日もセルフレッスンで仕事はなかったはずだが、雨に打たれて風邪でも引いたら大変だ。
誰も歩いていない道路の真ん中で千早はまわれ右、だんだんと繋がる音から逃げるように家路に着いた。

昨日の予報は珍しく当たったんだな、と感慨深そうに日高は庭へ続く窓際へ立った。
窓を叩く雨粒は徐々にだが勢いを増しているように見える。この調子だと九時頃がピークだろうから昼に来る二人は問題ない。
「おはよ、最悪の朝ね」
「舞、そういうこと言わないでくれ」
雨の音に起こされたのよ、と舞。せっかくの日曜日にもう少しの休みもくれないのか、と些か不機嫌そうにキッチンへと向かった。
「今日は俺にとっての大一番なんだ、早く晴れてほしいもんだけど」
「嶺司さんが焦っても雨雲は動いちゃくれないわよ？どうせ昼ごろには上がるでしょ」
キッチンのほうからカチャカチャと何かをいじる音がして、舞は小さく「よし」と一言。
毎朝毎朝健気に働くコーヒーメーカーを背にして、舞はのんびりと日高の隣に立って薄黒い空を見上げる。
「・・・千早ちゃん、なにかあったの？」
「なんで」
「最近歌ってる最中、よく集中が途切れるでしょ？」
「・・・そんなにわかりやすいか？」
渋い顔をした日高に舞は「全然」と返す。
「普通のファンぐらいだったら気付かないんじゃない？番組監督とかにも『少し調子が悪い』で通ると思う。私は前に会っていろいろ聞いたから、そういう意味で心配でね」
「・・・じゃあ春香は」
「いつも通り」
考える間もなく即答。ただ舞がそれ以外に何も言わないのは、暗に今の状態は悪くないということかもしれない。・・・当の本人が聞いたらショックだろうが。
「千早は今きっと焦ってるんだ。一番間近で春香の歌を聴いてるから」

「でも、まだ歌唱力なら千早ちゃんのほうが上でしょう？何を焦ってるっていうのよ」
「まあ、それなりの事情があるんだろ」
自分の中でもまだそれが確定されたわけではない。適当に誤魔化して自室へ戻ろうとすると、舞は何を察したのか「ふーん」と一言呟いたきり、それ以上の追及はしてこなかった。

そうして戻ってきた日高は手帳を手にしてこれから一週間の予定を確認する。
普段からしてきた動作だが、この日に限ってはやけにページが重く感じた。
仕事にレッスンにと数多のスケジュールの詰め込んであるこの手帳だが、自ら記した日高ですら違和感を覚える始末。

何故なら、そこに千早の予定はひとつも入っていないのだから。

その5『活動時間外の閑話急題』（後書き）

前書きにも書きましたが、今回は短めのものになっています。というかこの文面のまま次に入るよりは仕切りなおしたほうが読みやすいのではないかという微妙な思いつきからです。
構想当初から考えていた山場が次の話なので、なるべく早く更新したいと思います。

※追記　作中に出てくる千早の弟ですが、公式のどこを探しても名前が見つからないため、某所で使われていた『千歳』という名前を採用しています。もしこれがオリジナルということでしたら、言っていただければ名前を変更しますので、よろしくお願いいたします。

その６『決裂・決断・決意・そして』前編（前書き）

二カ月以上置いといた上で前後編とかね・・・。
本当にすいません、いろいろ試行錯誤してたら前編後編のバランスが取れなくなって、いろいろ悩んだ結果ここで切ることにしました。
後編はすぐに上げられればいいなあ。
それではシリアス（笑）のその６をどうぞ。

その６『決裂・決断・決意・そして』前編

バシッ！！

乾いた破裂音がひとつ、事務所に響き渡る。それに驚いてか誰も別の音を立てようとはしなかった。ただ彼女の荒い息遣いだけがよく聞き取れる。

日高は微動だにせず彼女を見下ろしている。その行動に間違いはないとでも言わんばかりに、彼は無抵抗を貫く。

打ち下ろした右平手は再び上がることはなく、その代わりに、

「どうしてあんなことを言ったんですか！プロデューサーさんっ！！」

春香の悲痛な叫びが７６５プロを支配していた。

事の発端は十数分前に遡る。

「どういうことですかっ！！」

一時。地表の水溜りには一切の波紋はなく、後は乾くのを待つばかり。

晴れたとは言い難いが雨はあがった今の状態とは逆に、７６５プロには暗雲が立ち込めていた。

千早のよく通る声はこういうときに厄介になる。横に棒立ちだった春香はその音波を全く回避出来ずに少しよろめくという間抜けな状態で、まだ耳の奥に残る鋭利な感覚を消し去ろうと頭を振った。

こっそりと離脱を図ろうとした小鳥であったが、第三者の身動き一つも許さないようなこの緊張感に気圧されて動けずにいる。歩いて十数歩先にある社長室を小鳥は恨めしそうに睨みつけるが、一向にそこが開く気配はない。

「一週間の休暇なんて、私そんなもの求めてません！」

「求めてなくても、これは俺が決めたことだからな」
普段からは考えられないほどの語気の強さだが、日高はそれに動じることなく事実を述べていく。
「プロデューサーさん、どうして千早ちゃんだけがお休みなんですか？わたしたちユニットですし、ここのお仕事も二人だと思ってたんですけど・・・」
スケジュールの書き込まれたボードには、以前と変わらず仕事が連なっている。普段ここには春香と千早『ｅ，Ｓ』がこなす仕事が書かれているはずなのだ。
しかし今回はどこを探しても『春香』の文字ばかりで、どこにも『千早』が見当たらない。
「すまないけど、この一週間は春香一人で頑張ってもらう。まあ俺もいるけど、ユニットとして活動することはないから頑張れよ？」
「いや、頑張れよ？じゃなくてですね・・・その、えっと、なんで千早ちゃんが」
「・・・この一週間は、歌を歌えないということですか？」
上手く繋がらない彼女の言葉を、千早は身を乗り出して遮る。
「仕事はなし。レッスンもだめだ。どうしてもというときは自主トレだけ」
「は、話が違いますプロデューサー！私をトップボーカリストへ導いてくれるって約束したじゃないですか！！」
「誰も約束を破るとは言ってないだろう」
「同然です！」
バンッ！
「ひっ！？」
置かれたペンと春香の肩が一緒に跳ねた。それに気圧されてか春香は千早の隣から二歩ほど後ずさる。
デスクに振りおろされた掌はいまだびりびりと震えて、空気を切り裂いたような余韻が伸びている。憤りで肩を揺らす千早だったが、
「千早、お前今焦ってるだろう」

「・・・え」
日高の言葉に伸ばした千早の指先が一瞬ピクリと動いた。
千早の表情は「何故そんなことを言うのか」という戸惑いではない。どちらかと言うと「何故それを知っているのか」と、心を見透かされた時のそれだ。
「なんで、そんなことを言うんですか？私は焦ってなんか」
「最近、ボイスレッスンの頻度が倍ぐらいに増してるぞ。そんなにやって喉が壊れることを考えられない千早じゃないだろ」
「それは・・・」
くっ、と言葉が詰まる。目線を左下へと泳がせて何か考えているふうだったが、
「歌唱力の向上のために、私自身で考えた結論ですから。コンディションの管理ぐらい、自分で何とかします」
答えはすぐに見つかったのか、先程までちらちら見えていた困り顔からいつもの無表情に帰る。
「・・・悪いが千早。お前が何と言おうと、俺にはどうしてもお前が何か焦ってるようにしか見えないんだ。もっともそんな感覚はずっと前から———初めて会ったときから薄々感じてたんだけどな」
初めて千早の歌を聴いたときの、あの胸の奥に残ったちくりとした気持ち悪い感覚を思い出す。千早の歌はあの頃と何も変わっていない。
「こうしてずっと近くで歌を聴いてきて、やっと薄らぼんやりとだけどわかってきた気がするんだ」
「随分もったいつけるんですね」
日高の言い回しに千早は少し嘲るような笑みを見せた。
怒りに吊り上がるでもなく、悲壮に下がるでもなく、どこまでも平坦な両眼は彼を冷たく射抜く。
まるで赤の他人として扱われているような感覚に日高は少しばかりのプレッシャーを覚えた。
だが、耐える。もう少しなんだ。後はあの言葉さえ言ってしまえ

ばきっとこの場は一番悪い形でおさまってくれる。
　でもそれを言った時にきっと、俺は千早の――。
「・・・まあ、勿論ボーカルの向上を悪いとは言わない。けど、もうそろそろ歌と真正面に向きあってもいい頃じゃないか、千早？」
「私が歌に対して真剣だということは、ずっと近くで歌を聴いてきたあなたならわかってると思っていましたが」
「千早自身、本当にそう思ってるのか？自分で違和感を覚えないわけじゃないだろう」
「・・・く、下らないことを言わないで――」

――今までのすべてを粉々に砕くことになる。

「そんな歌じゃ、お前の弟になんて届きやしないぞ」
「――っ！？」
　千早の言葉を遮るはっきりとした日高の言葉は、一瞬で場の空気を凍らせるに足るものだった。
（言えた――）
　腹からひねり出したかのような自分のセリフに、ひとつの終着が見えた安堵とそれに伴い背筋に感じる多量の発汗のせいか、日高は肩を少し震わせた。
「ぷ、プロデューサーさんっ！？いくらなんでもそんなこと――！」
　日高の言葉に身を乗り出したのは、思いの外春香のほうだった。しかし、
「・・・もういいです」
「・・・え？千早ちゃん？」
　肩をすれ違わせるように、千早は二人に背を向ける。
「千早、一週間だ。お前なりにゆっくり考えてみろ。本当に今のままでいいのか。答えが見つからなくても、それでいいから」
「・・・・・・」

日高の言葉に反応する様子はなく、千早は淡々と出入り口に向かって歩いていき、ノブを回す。
「ぷ・・・プロデューサーさん、そんなこと言ってないで止めてくださいよぉっ！千早ちゃん行っちゃいますよっ！？」
「・・・日高さん」
キィ・・・、とドアを鳴らして出て行こうとする千早だったが、ふと動きを止めて、頭だけで振り向く。
「あなたは・・・会った時のあなたは、そんな人じゃないと思っていました。ですが・・・私の思い違いだったみたいですね」
「ち、千早ちゃん！待ってっ！！」
そう言い残して千早は板一枚挟んだ向こう側へと消えていく。
春香による必死の引き留めも意味を成さず、伸ばした腕は空を掴む。
悲しげな春香の視線のその先で、鈍色のドアは無情にも口を閉じた。

「プロデューサーさんっ！！！」
「春香ちゃんっ！？」
振り返りざま発した悲鳴のような形をとった春香の感情が、それだけに留まらず無意識に動いた右手に乗って日高へと振り下ろされたのは、その直後のことである。

「だ、大丈夫ですか日高さん！？」
「大したことないですから、小鳥さん。気にしないでください」
そうして寄り添った小鳥を退けて、春香の前に立つ。
「・・・！あ、あの・・・えっと・・・」
「・・・・・・」
黙ったままの彼は、ゆっくりと右手を春香の頭上へと運んだ。

自分のした行動を思い出し、咎められるだろうと春香は肩を縮める。きゅっと目を瞑った春香は、彼の掌が頭に近づいたのを感じてピクリと肩を震わせた。
「・・・ありがとう、春香。」
「っ！・・・え？」
春香の予想とは大きく外れ、日高の手は勢いなく春香の頭に収まった。
「俺のこと叩いてくれただろ？」
「え、いや、でも・・・ごめんなさい・・・」
「まさか日高さん、そんなご趣ｍ・・・なんでもないです」
横やりを入れようとした小鳥に、日高の冷たい視線が突き刺さる。さながら先程の千早だ。
それならいいです、と日高は呟き、
「いいんだよ春香、あんなこと言った俺に怒るのは当然のことだ。正直、自分で自分を殴りたい気分だったからさ」
と今の落ち着いた表情からは考えられないようなセリフを口にした。
驚きと戸惑いを隠せずにいる春香を余所に、日高は元居た席へと戻る。
「え、あの・・・どういう・・・プロデューサーさん？」
「どうやら、もう終わったようだね」
「あ、社長・・・」
丁度騒動が終わった頃を見計らったかのように、小鳥が睨みつけていたドアから黒い影が姿を現した。
「社長、一人だけ別の部屋だなんてずるいですよ～」
高木の姿を見つけて小鳥は早速非難を飛ばすが、彼は涼しい顔（？）をして平然と、
「何の話かね？私はただ社長として業務を粛々とこなしていただけだが？」と答えてみせる。
「すいません社長、お騒がせして」

「いやいや、構わないよ。話に聞いていたよりすこし過激だったみたいだがね」
「千早の意思は固いみたいでしたから、変わってもらうためにはショックが必要だと思いまして」
「荒療治がすぎるんじゃあないかね？まあ、そのあたりもしっかり・・・」
「ちょ、ちょっと待って下さい！！」
どうしても思考がついていかず大慌てで話に割り込んだ春香だったが、あまりに混乱しすぎたせいか何がおかしいのかわからずに、二の句が継げない。
挙句の果てに出た言葉は「なんで？」という、簡潔明瞭に『すべてがわからない』を示す情けない疑問詞だった。
「千早に変わってもらうためだ」
「・・・？」
余計にわからなくなった、という風な顔をすると「詳しく話すから、会議室に行っててくれないか？」と日高は立ち上がる。
給湯室に入っていく日高を眺めながら、春香は一人首をかしげつつも会議室（応接間のようなもので、カーテンで区切られている）へと入っていこうとしたが、何を思ったのか渋い顔をした高木は、彼女に「ゆっくり話してくるといい」と言い添えて、社長室の扉を開けた。

「春香、お前が千早に初めて会ったときに聞いた歌を覚えてるか？」
「・・・？はい、まぁ。『Ａｌｉｖｅ』でしたよね。舞さんの代表歌」
いや、そうじゃなくてだな。そう言いながら左手に持ったコップを春香の前に置き、自分は春香の対面に座る。
「どんなだったか覚えてるか？ってことさ」
「『どんなだったか』？」
どんなだったっけかな～、とこめかみに人差し指を当てながら考

えるが、
「じ、上手でしたよね」
「・・・うん、そうだな」
どうやら適当な答えが見つからなかったらしく、ばつの悪そうな顔をした。
「じゃ、じゃあプロデューサーさんはどうなんですか！」
平然と流されたことに恥ずかしいのかそれとも怒っているのか、春香は顔を真っ赤にして問いを日高へと突き返す。
「俺か？春香と同じだよ」
「・・・はい？」
何事もなかったかのようにコーヒーを呷り、それから、
「上手って言葉以外の感想が、今も昔にも出てこない」と付け足した。
「それならそれでいいんじゃあ・・・」
「それじゃあダメだから千早に変わってもらいたいんだ。・・・例えばさ」
カップを置いた手は日高の目の前でゆっくりと組まれる。
『ああ、多分真剣なことを言うポーズなんだろうな』と春香は思った・・・のかどうかはわからないが、倣って身を堅くした。
「春香はなんで歌ってるのか、って前に訊いたよな」
「覚えてます。『歌が好きだから』って答えたはずです」
「うん、そうだったな。じゃあ、千早がなんで歌ってるのか」
「弟さんのためです」と、春香は即答する。
「プロデューサーさんも一緒に聞いたじゃないですか。弟さんが昔からずっと褒めてくれた歌で、弟さんとの繋がりを保ちたいって千早ちゃん、言ってたじゃないですか！それなのになんであんなこと・・・！」
「それなら春香、千早の弟が昔から褒めてくれた歌が、あんなに何も感じられない歌だったと思うか？」
二か月前、千早が弟の墓前で二人に話したことだ。よもやそんな大

事なことを忘れているわけではない。いや、日高は『話してくれた』からこそこの決断をしたのだ。
「え？・・・・・・あ」
「・・・じゃあ春香。春香はステージで歌を歌ってる時ってどんな感じなんだ？何にも感じないってわけじゃないだろう」
「そりゃあ、楽しいですよ！ファンのみんなが一緒に盛り上がってくれる時なんてもう最高で！わたしがこうやって楽しく歌ってるっていうのがちゃんと伝わってるんだなぁって嬉しくなって・・・あれ？」
「そういうことだ」
「・・・千早ちゃん」
熱を帯びていた春香のセリフは、途中で何に気付いたのか急激に冷め始めた。
「舞台で歌うとき・・・まあ千早の場合はレッスン中もそうなんだろうが、何も感じずに延々と歌える奴はいない。きっと歌う前や歌ってる最中、歌った後なんかには何かを感じているはずだ。それが例えば春香みたいに『自分の思いは伝わっているのか』なんて抽象的なものや・・・」
「『自分は何のために歌っているのか』・・・」
春香の反応に日高はひとつ頷いて、カップに残ったコーヒーをすべて呷った。
「うん。やっぱり春香がいてよかった」
「・・・え！？な、なんですか急に・・・」
「春香がいなかったら、そばで春香の歌を聴いてなかったらきっと千早はこの事に気付かなかっただろうな、ってさ」
「わたしより千早ちゃんのほうが断然上手じゃないですか。それなのにわたしの歌を聴いて気付くことなんて・・・」
「・・・まあ確かに千早は上手いけどな」
「嘘でもいいからフォローしてくださいよ！」
「いや、誰も春香が劣ってるなんて言ってないだろ？」

日高の反応に春香は顔を真っ赤にする。
やっぱり気にしてはいたんだな、と日高は少しにやけた。まあそうでもなければ春香がボイスレッスンを妙に千早と被せることもなかっただろう。
互いに意識し、上へ上へと昇っていく。二人は多分そういう関係性にあるのだ。
「春香だからこそ気付かせられた。千早の歌が上手いのはレッスンの量もそうだが、その異常な向上心にあると俺は思ってる。向上心っていうのはさ・・・おっと、ジュースなくなったか。持ってくるよ」
「いいです、続けてください」
立ち上がりざまに春香のコップを持とうとしたところを、春香にひったくられる。
滅多に見ない春香の真剣な表情に、日高はおとなしく腰を下ろした。
「・・・向上心っていうのは義務感や責任感ってやつから生まれるって思うよな」
「じゃあ千早ちゃんは、その責任感・・・何のかはわからないですけど、それで歌が上手になったってことですか？」
「いや、それだけじゃああんなに上手くはならない。嫌いなことを責任感だけでやろうとしたって、そうそう上達するものじゃないだろ？」
「・・・まあ、確かにそうですけど」
「確かに千早は今、何か重い荷物を背負ってるかもしれないが・・・きっとその奥には『歌が楽しい』『歌が好き』っていう単純で大切な思いがあるって断言できる。そして春香の歌はそれそのものだ。本当はお前と歌っているうちに気付いてくれるのがベストだったんだけどな」
「・・・まるで舞さんみたいですね」
春香が？と日高。とんでもない！と春香は目の前で手を交差に振

る。
「プロデューサーさんがですよ。楽しいとか楽しくないとか、そのまんまだなぁって」
「なんだそりゃ。・・・まあ要するにだ、俺はあの公園で初めて会ったときからずっと、千早が『楽しく歌ってる』姿を見たことがない。俺は、自分がプロデュースする娘にはみんな楽しく歌ってほしいと思ってる。アイドルとしてもそうだし、一人の女の子としてもだ」
半年前、公園で偶然聴いた千早の歌声を思い出して、またチクリと胸が痛む。
あんな表情で歌う歌にどうしてこうも心惹かれるのだろう。当時はそう思っていた。
それだけじゃないんだ。理由はどうあれ彼女にも春香のように、舞のように、歌を楽しんでいた頃があったからこそ、あれだけ綺麗な歌がある。
もう一度千早に思い出させる。歌は苦しいものじゃないと教える。それがきっと俺の。
『プロデューサー』の役割なのだろう。
「それじゃ、あんなこと言ったのも千早ちゃんのために・・・？」
「『ため』になるかどうかはわからないさ。千早がアイドルを辞めるってリスク承知であんなふざけたこと言ったんだから。俺は千早の心配してないで、やるべきことを最大限までやるしかない。千早をまた事務所で迎えるためにも・・・」
なんにせよ、これから忙しくなる。日高は立ち上がりながらそう思った。
それは自分に寄せられた信頼を裏切った形になる千早への贖罪であり、これがもしかしたら『最後』のプロデュースになるかもしれないから。
「・・・プロデューサーさん。千早ちゃん、きっと戻ってきますよね？」

後ろ姿に何を感じたのか、春香は不安げな声で日高に尋ねた。
「・・・ああ、もちろんだ。ほら、春香も千早の心配してないで。昼から撮影の仕事がはいってるんだから準備だ。春香のプロデュースに手を抜くつもりなんてないからな？」
「わ、わかってますよ！すぐ支度してきます！」
バタバタと社長室を出て行った春香を見送って、日高はひとつ溜息。
―――『わからない』なんて言って、これ以上春香を不安にさせるわけにはいかないよな。
自分が言ったことの意味をわかってくれるなんておこがましいことは思わない。
あれだけのことを言った上でまだ千早のプロデュースを続けられるなんて甘い考えも持たない。
ただこうして自分の歌と真剣に向き合うことで、何かを得られれば・・・。
「千早には暴言、春香まで不安にさせて・・・これじゃあプロデューサーとして失格だな」
自分のしたことすべてを思い返し、日高は自嘲を込めてそう呟いた。

「～♪・・・～～～♪」
小さな公園に、聴き覚えのある透き通った声が響き渡る。
「あー、あ～・・・うん」
喉の調子に異常はなし。普段とどこも変わらないことを確認してから、千早は滑り台に近いベンチに腰を下ろした。
いつもの公園で発声練習をしたかったところだが、生憎今日は土曜日。子供らの数は勿論のこと、それを連れた親の数も平日のそれとはまったく別物である。

千早は仕方なしに少し外れたこの公園へと足を向けたのだった。
「・・・・・・『本当に、今のままでいいのか』、か」
一息ついたその時、千早は先程聞いた日高の言葉をもう一度自分に言い聞かせてみる。
現状に満足しているわけじゃないし、当然そういう意味の言葉じゃない。日高が言いたいのはきっと『今のまま歌っていて、それでいいのか』ということなのだろう。
（それでいい・・・そう言うしかない）
否、それでなくてはいけない。そうでなければ千早の今までやってきたこと、積み重ねてきたことが、日高の言葉を認めてしまうだけで全て崩壊してしまうから。
何故日高があんなことを言ったのか、千早には到底理解できることではなかった。というより、理解させるにはあまりに言葉足らずだったという方が正しいか。
なんにせよ今の千早にはこうするしか方法がない。きたる一週間後へ向けて自分の歌にさらに磨きをかけ、日高を何とか納得させるしか。
―――『そんな歌じゃ、お前の弟になんて届きやしないぞ』
わかっている。だからこそボーカリストとしてさらに高みを目指す。日高はそれを理解してくれていると思っていたのに。
奇妙な喪失感を覚えた千早はすくっと立ち上がり、発声練習を再開する。
（・・・私なりに、彼を信頼していたってことなのかしら）
それならば・・・きっとこの喪失感は、自分の拠り所がなくなったからのものだろう。
あの時のものとは遠く及びはしないが、似ている。
千歳を失ってから歌うたびに感じていた、胸の奥にぽっかりと穴が空いたような感覚に。
―――『そこに夢を目指してる子がいるなら俺は自分のできる限り

のことをする。それは変わらないから・・・・って、千早もそうだったな』

（・・・『私は、歌手が夢ですから。アイドルには興味ありません』）

何故こんな言葉が・・・初めて会った時の彼の言葉が浮かぶのだろう。千早は発声を続けながらもあの時のように返す。

―――『わかってるよ。ただやっぱり力になれなかったなって悔しいだけだ』

（『本当に、変な人』・・・だけど）

いつの間にか、流れるような千早の声は止まっていた。

水中を昇る気泡のように次々と浮かび上がる日高の言葉。それの中には、あくまで千早が見てきた内でだが、ひとつとして嘘はなかった。

「・・・日高さんは、私に何かを伝えたかった？」

変な人だが、あんなことを平然と言う人間ではない。

『お前なりにゆっくり考えてみろ。本当に今のままでいいのか。答えが見つからなくても、それでいいから』

「・・・・・・」

（私は弟のために歌いたい。あの子がどこにいても笑っていてほしい。ただそれだけなんです・・・）

日高の言いたいことが分かったところで、今の千早には何の意味も持たない。

自分が歌う意味は最早、そこにしかないと思い込んでいるうちは。

「はーい、お疲れ様でーす！」

「ありがとうございましたーっ！」
午後四時。カメラマンの号令とともに仕事が終了する。
撮影の仕事・・・もそうだけど、今まで仕事をするにはいつも千早ちゃんと一緒だから、お礼のセリフも一人分減って、少しさみしい感じだ。
「お疲れ、春香。お茶とスポドリとどっちがいい？」
カメラマンの後ろで様子をじっと見ていたプロデューサーさんは、出迎えると同時に両手にペットボトルを差し出してみせた。
今日はあまり疲れていないし、あまり糖分を摂る気はないのだけど・・・。
「・・・じゃあ、スポドリのほうで」
いつもお茶のほうに伸びている千早ちゃんの手が脳裏に浮かんで、ふっと手控えた。
キャップを開けて、一口流し込む。・・・逆に喉が渇きそうだ。やっぱりお茶にしておけばよかった。
スタッフさんはすでに撤収の準備を始めている。さっきまで立っていた場所を照らすライトはすでに消えて、うす暗くなった空間はやはりどこかわたしにとって物足りない。こうして休憩している今にも、横に座っていたはずの千早ちゃんが立ちあがってレッススタジオへ向かう準備を始めているのが目に浮かんで・・・わたしは少し溜息を吐いた。
「はぁ・・・」
「どうした、春香？」
「いえ、プロデューサーさんは強いなぁ、って思って」
「この短期間で皮肉が上手くなったなぁ」
にやにやしながらそんなことを口にする。どう聞いてもからかい口調のそのセリフにわたしは少し恥ずかしくなって「そういう意味じゃないです！」と声を荒げた。
「やっぱり、気になるよな」
「わかってるんじゃないですか。意地悪しないでくださいよぉ」

「はは、悪い悪い。・・・俺が『千早が戻ってくる』って言ったこと、信じられないのはわかるけどな」
「それはもういいです。何回言ったって千早ちゃんが今すぐ帰ってくるわけじゃないし、プロデューサーさんなりの考えがあったってもうわかりましたから」
それを聞いたプロデューサーさん妙に納得しなさげに首を傾げる。
実際のところ、朝のことは本当にもうよかった。
プロデューサーさんなりに千早ちゃんのことを考えての行動だったこともわかったし、わたし自身の中にこうなったらもう千早ちゃんにはばっちり変わってもらって、また一緒に歌いたいっていうふっきれた思いがあるから。
「もっと別のことなんです。千早ちゃんの歌を初めて聴いたとき、わたしが無理やりアイドルの世界に連れて来たのはやっぱり間違いだったんじゃないかな、って・・・」
「間違い？」
「千早ちゃんの歌に、あんな想いが込められてたなんてわたし知らなくて・・・ただ一緒に、千早ちゃんと一緒にステージで歌えたらどんなに楽しいだろうって、自分のことばっかり考えて・・・」
あの時引いた千早ちゃんの手は、今はもう離れかけている。
興奮や期待の溢れていたわたしの手のひらには、今や後悔一つ残ったきり。
「それでいいんじゃないかな。・・・いや、むしろ千早にはそれでよかったんだよ」
「そんなはずないです。きっとあのまま普通に歌手を目指してれば・・・わたしが余計なことした所為で・・・」
「結果が出てないのに『余計なこと』って言うのはよくないぞ、春香」
「あいた！？」
こつん、と小気味のいい音がする。軽く小突かれた頭のてっぺんを少し大げさに擦った。

手の出所は間違いなくプロデューサーさんだ。そう確信して顔を上げたとき、自分がどれほど深く俯いていたかに気がついた。
「学校のテストじゃないんだから、答えは決まってるものじゃないさ。春香自身がしたことが正解になるように動いたり、周りの人に頼んだり・・・そうやって答えを探していくんだ」
「わたしがしたことが余計なことかどうかは、まだわからないってことですか？」
「というか、千早が例えば春香と出会わずにあのまま歌ってたとしたら、千早はきっと歌手でも上手くは行かなかったと思うよ。今回のことにもしかしたら気付けなかったかもしれないからな」
「けど、千早ちゃんが『弟のために歌う』って言ってたこと、わたし間違いじゃないと思うんです」
もしわたしがそんな立場に立たされたとしたら・・・きっと歌うことも怖くなってしまうだろう。目の前で弟が死んだことはきっといつまでたっても、弟との思い出を歌うたびにまとわりついてくるものだから。
「そりゃあ勿論だ。ただ問題は『正解』か『間違い』かじゃないってことだよ」
「・・・？」
意味深そうに語るプロデューサーさんは、脳内に『？』マーク満載のわたしを見て苦笑い。
・・・だってわからないんですもん。そんな顔しなくたっていいじゃないですか。
「はは・・・。ほら春香、いつまでも話してないで事務所に戻ろう。この後の時間で一応レッスンスタジオは取ってあるけど、どうする？」
「勿論行きますよ。今日はそんなに疲れてませんし・・・・・・千早ちゃんが帰って来た時にサボってたって思われたくないですから！」
一瞬しまいかけた言葉だったが、無理やり押しだして発声する。

プロデューサーさんはそれを見て少し笑みを浮かべていた。
そうだ、きっと千早ちゃんは帰ってくる。プロデューサーさんと千早ちゃんを信じて、わたしはわたしのやるべきことをやろう。
今は待つことしかできないけれど、わたしなりにとびきりの準備をして迎えることぐらいはできるはずだから。

秋の夜はつるべ落としと言うが、夏の余韻が残っていたからか外に差していた薄明かりが、今まさに消えようとしていた。
八時。デスクにはまだ日高は見えない。三十分ほど前にレッスンを終えた春香をここに送り届けてからまたどこかへ行ったようだ。
春香は十五分ほど小鳥と話しこんでいたが、楽しい時間もそこそこに春香は事務所を後にする。朝よりは彼女の表情もやや明るくなり、小鳥は少しほっとしていた。
「日高さん、帰ってこないですね」
「今日はすこし早目に終業させようと思っていたんだが・・・」
事前に計画していたこととはいえ、日高自身思うところもあるだろう。小鳥は窓の外にぽつぽつと点き始めた光を席からぼーっと眺めながら、
「言うこと聞きそうにないと思いますけどね」と呟いた。
それは、高木も薄々分かっていたことだ。日高の性格を鑑みれば尚のこと、小鳥の言葉への理解が深まる。
つまるところ、おそらく彼自身は千早、いやアイドルたちのために休むことなく働きたいと思っているのではないだろうかということだ。
「うむ、変に堅い性格をしているからね・・・まあ、それが彼のいいところでもあるのだが」
「・・・社長はこの計画って、どう思いますか？」
「どう思う、とは？」

「だって千早ちゃんがあんな顔するところ、私初めて見ましたから・・・。きっと千早ちゃんが一番触れられたくないところだったんだろうし、結局心の傷を増やしただけで終わるってこともあるかもしれないじゃないですか」
「小鳥くん、如月君のプロデューサーは彼だよ。彼らにしか分からないことが絶対にある。私たちが気軽に口を挟める部分ではないのだよ。それは普段から彼女らの世話をしてくれている小鳥くんについてもそうだし、社長である私にもね」
　そんなふうに言われたら・・・、と小鳥はぶつぶつと文句を言いながらも立ち上がり、真っ暗な部分をブラインドで隠していく。
「まあ・・・少し過激ではあったし、キミが心配する気持ちもわからなくはないがね」
　不満そうな後ろ姿に語りかける高木の声は、叱られた後の子供をあやすときのそれだった。
「後は彼女たち次第なのだよ、我々が手を出すことは出来ない」
「けどそんなの・・・寂しいじゃないですか。同じ事務所の人間なんだから、千早ちゃんだって相談ぐらい少しはしてくれても・・・」
「それでは解決できないからこそ、日高くんは如月くん自身に託したのだよ、小鳥くん」
「・・・それじゃあ、いままで一人でいた時と変わらないんじゃないですか」
「変わるとも」
　天海くんがいる、日高くんがいる。
　小鳥くんもいるし、日高舞との出会いもあった、と高木は続ける。
「すべてが如月くんに影響を及ぼしてくれる。大丈夫だ、如月くんは必ず帰ってくるよ」
　自信のこもった彼の言葉に小鳥は少し苦笑し、それから
「社長はどこに行ったんですか？」とお得意の茶々を入れた。
「私はあくまで『社長』だからね。陰でひっそりとサポートに徹するよ」

いつものことだ、と高木は軽く流してから、目の前のディスプレイに目を落とす。
それを合図に小鳥も自分の仕事へと戻る・・・前に、ブラインドを少しずらして狭い空を見上げた。
暗天に雲はなく、空はまた照らされるのを待っているようだった。

その６『決裂・決断・決意・そして』前編（後書き）

まだ話が終わってないので、この話に関しては後編で一気に書きたいと思います。申し訳ありませんが完結まであと二話ほどお付き合いいただければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1123v/

私は愛どる！春香＆千早過去編

2011年12月25日00時51分発行